

現獨逸皇帝の皇后は世界でも有名なる賢婦にて在らせらるゝとの事、それで大そう家庭がよろしいので朝な夕なの禮拜式には皇子皇女さんがたを前にすへて而して其御母なる皇后には其後につきなされていとも嚴肅に祈禱をさゝげ讚美歌を頌ひて禮拜し給ふとのこと、實に國民のよき模範を示し給ふとのことと思ふて、

一番年の少い三郎君が一番前に御すはりに成りて讚歎章を誦し禮拜を爲して如來さまの御恩を報じ奉ることは本とうにそれは人間の道でありますと拜します。またおとりさまは御みせに御座つてそれを聞いて在つしやる。あなたがたの御地と此土では百と二三十里隔たりますから三郎君の拜禮の御聲は耳には聞えませんが心に聞いて居りますよ。

私 はもう四月の二十日過まで巡教の日割が定まりましたから一日も休みなしに如來

さまに奉仕の一心で傳道いたします。外のことはまたのちの便に申上りますよ。

三郎君が一番前にしてみな様にまで申進じます。

## 二百十二

和泉式部が夢の世にあだに果敢なき身を知れと教へてかへる子は佛なりとの實感を  
 得るまでは幾多の信仰の階段を経たるのちにて候はん。式部が曾て其女小式部の内侍  
 に先きだれし當時の哀悼悲痛のいかに甚だしかりしことは、諸ともに苔の下には朽  
 ちずしてひとり憂きめを見るぞかなしきとの詠にぞ洩されたり。昔も今もかはらぬは  
 人情にて候。何人か愛子の死別に慟せざらむ、親に先きだつみちを知らねとの心に  
 て逝きし三郎君を哀悼に對して同情に耐えず候。何事も皆いつはりの世の中に死ぬる  
 ばかりは誠なりけり。すべての事は豫期せし事が必ずしも實現せざること多し。死ぬ  
 る事ばかりは何人も必ず期待せるなし。人の死其物が人に對して幸か殃かまだ決定

すること能はず候。死其物が不幸と云ふよりは人生の自覺の光を得ずして闇より闇に入る人こそ實に不幸とおもはれ候。

就いて渡邊のきみに御すゝめ申し度き事は家中の男女を通して悉くいまだ大ミオヤの光明に接せずして人生空しく闇よりくらきに入る比々みな然らざるなし。願くば光明會を再び發して如來の光明の中にみちびきて人々を如來永遠の光明の人たらしむるやうに成り候はゞ意義ある人生活きがひある人生と相成申候。

時到れるや。光明主義西に東に到る處に行はれ候。また西に東に志士仁人此道に入ること、むかし今より十年のそのかみとは大にかはりて志深き人士は悉く此道より眞の道に入る光明主義が現代の國民を闇黒より永遠の光明に復活せしむる道にて候。甚深の眞理を闡明したる大乘の圓教は是眞義を説明したる學說にて候。大乘圓教の眞理を一切國民の上に實行せしむるは念佛三昧光明名號の一行にて候。されば聖善導が光明名號攝化十方とは只彌陀の光明のみが十方一切衆生を攝して人々を靈活せ

しむる行にて候。

若し人至心不斷に念佛三昧を修する時は必ず心靈開發して如來の光明に靈化せらるべし。其靈化せらるゝ時はいかなる心理状態と相成候哉となれば、即ち清淨と歡喜と智慧と不斷に靈化せらる。されば行は念佛の一行にあり、解は十二の光明に依るべし。若し念佛の一行を以て三昧發得する時は十二光明が自己心中の顯現とならむ。十二光の眞理を實感せんと欲せば念佛の一行に彌陀無量光明中の無量無邊無盡不可說不可思議の妙法秘密藏を開かんと欲せば十二光は秘密の寶鑰なり。若し釋尊此土に出現し玉ひて十二光の寶號の寶鑰を與へ玉はざりせば一切衆生は如來の秘藏を開きて其甚深の内容を窺ふこと能はざりしなり。此十二光の寶鑰は古往今來いまだ曾つて眞の寶鑰たるを知るの人の師なく只虚しく寶の持ちくされたるなり。物理上の電力が昔し空しく使用せざりし如く若し人念佛して十二の光明の寶鑰を以て如來の秘藏を開きて初めて活きたる佛教となり人生の眞義を悟ることを得るなり。

時到れる哉。

如來は世の爲に此寶鑰を與へ玉へり。

折角人と生れ人生の眞意義を知らず闇より闇に入る比々皆爾り、光明主義を以て之を照すにあらずば何に依つてか救はれん。

願くば其の地方の人々の爲めに光明主義を宣傳の爲めに保議し玉へよ。

三郎君の冥福の爲にまた現在活ける人の爲に三郎君の弔辭にかゆるに此言を以てす。

## 二百十三

其ののちはうち絶えて音信さへも遠うしく相成候こと本意なくは存候へども日に日に目の前にせまりくる事々のために追まはされ無間の責を受けぬれども是もおのれの身に遁るべからざる因果の報ひとおもへばさすがに愚痴も出ずに、のみかは還つ

て我業を果たすためぞと存じて、いさみすゝみて千手觀音ぼさつに倣ふて、光明の中  
にははた闇黒のなかにははしらねども、はたらき居り候ほどに、他事ながら此身のた  
めには御安心給はんことを望み候。

其のちいかゞ、光にみたさるゝ御家にはますゝきよきみちにすゝみすゝみて、け  
ふこの頃の暖かにしてまた温かなるごとくに

大ミオヤの慈悲のみひかりにいとまきよくして且つあたゝかなる妙なる氣にあふて、  
家の庭に咲き匂ふときはの花は、此世ながらの樂しき園に逍遙するとおもふこそ、實  
に／＼よろこびの極みなれ。

大ミオヤの靈徳をうたふ讚美のこゑはオルガンの音と共にこゝろを淨土にすみわたる  
らめ。

琴瑟相和する家には平和のうたのこゑすめりとかや。ましてきよきが中にいとまきよ  
きみほとけの光にはへる庭に於ておや。五塵六欲のあくたにまみれ六根五濁の淤泥に

溺るれども清きみひかりにそゝがるればいつしかこゝろも淨土にすみわたり八功德地  
にこゝろもきよめられ、すみたたえたる水のごとくになりぬべし。

此世は苦のすみかにて雲井の月の宮よりも星洩る賤が伏屋まで何處か愁嘆の聲な  
らむ。不樂閻浮と悲觀するなかれ、さはさりながら阿彌陀佛去此不遠、如來歡喜のうた  
ふ處には慈悲の和氣にもよふされ朝日に匂ふさくらよりもきよく麗はしくときはにか  
ぐはしき法喜禪悅の樂しき春は永しへに花のゆく日とてなからむ。

## 二百十四

時分柄御暑さに向ふ折、皆様御きげんよく被在候事大慶此事に候。愚納三月下  
旬當地に推參して以來已に六旬日多くは當山に在りて聖經をしらべながら例の聖像を  
うつし候。此後一七日ばかり熊本市にて傳道候。當山は鎮西本山とて鎮西流祖正宗  
國師の開かれ給ふ山にて其創立の縁起は當國の總司草野入道要阿深く國師に歸依し寺

地を寄進し三十六坊を建て其妻作阿田地を寄進し境内は東西七町南北五町境外は凡そ東西八町南北二十三町悉く寺域に屬し水田百二十五町を領せりと云ふ。屢沿革ありて今は昔の比にあらずと雖も中々大地にて九州にては各宗に通じて第一にて候。法然上人京都にて念佛門を開き其門人鎮西上人此地に傳へ來りて專修一行を弘め其弟子記主禪師東國下總にゆきて其法を弘めそれより進みて淨土宗といふ一宗とはなれり。法然上人京都にて二祖が當地にて弘めたりしも三祖が東國に於て傳道せしものにて根底をなさざりしかば鎮西流は微々たるもの或は途中にて消滅せしかはわからざりし。

下總常陸は今日は念佛門もすべても振はざるも淨土宗は下總にて本願寺流は常陸にて根つきしによりて、今日は全國に蔓延して枝葉茂り花麗しく果よく實のりしも根は下總常陸のあいだに於てなせり。當に開かんとする光明主義も下總に於て是より根底を作らんと欲す。當地にて傳道を試みるに九州は舊習にて關東人よりは先進の氣象に



乏しきように見うけられ候。尤も當貫主の如きは自らは舊習深き方なれども將來先進の望なきにあらず。殊に愚衲に對しては最も歸依し給ふこと深く、歸依せらるゝといふもおかしいけれどもそれでも實際である。今ひとりの九州傳道部長なる重松師なるあり。此師の爲に屢々將來の宗義はかく／＼ならざるべからざることを陳述しければ同師は非常に隨喜し。有志を募りて一七日計り講習を願はれ候。

宗教が未開の時代より開明に進むに隨つて自然に階級あることは曾つて御話いたせしことゝ存じ候。なれども世界通じて三階にわかつ。初自然教、二超自然教、三圓具教、自然教は幼稚なる知識の時代の宗教、神に自然界の日月山河八百萬等を崇拜し而してかたちの上の幸福を祈りて後生とか死後の幸福ははまだ知らず我日本の神道また佛教にても平安朝に開きし眞言天臺は即ち現世主義である。現世いのりの宗義を自然教と云ふ。次に世間の文化と宗教と共に進んで鎌倉時代に發りし超自然教は淨土教の如き現世は夢幻のしばしのほど未來遠き極樂に生れてこそ眞の幸福は得らる、されば

此世は仕方がないから、未來死して後極樂まいりの念佛また信心。阿彌陀さまでも此世はしかたがなしといふのか、此自然界を超えたるむかうに望を立つるが超然教であるたゞ肉體の幸福を求めず靈魂の救を専らにす。即ち淨土宗眞宗等の主義是なり。世は文化と共に進みて當に眞の宗教世に出でんとす。是ぞ圓具教即ち如來光明主義である。其豫言者は即ち佛陀禪那である。豫言とは此より將來は斯主義に依つて救の道となすてふ、今日にして將來の宗教を世に紹介するもの、謂なり。故に豫言者は舊來の宗教家には憎嫉せらる蛇蝎視せらる。釋迦キリストにしてもまた法然日蓮にしても或一分の人には歓迎せられ一分の人には憎まれ妨害加へられし。これ免れ難き理であるさて圓具教の如來光明主義は客體の如來を必ずしも遠き彼岸に置かず、十方世界悉く活る如來の天心光明中である。但し衆生煩惱に障えられて之を知見すること能はず。然れども信心徹到すれば如來の心光と衆生の信心とは三昧一致して光明を發得することを得。人の天然即ち生れたまゝの意識は本より劣等なり無明なり罪惡な

り心光獲得して始めて靈格となる。光明中の人と更生す。更生即ち往生なり。精神の更生である。更生したる後といへども煩惱なきに非ず。然れども光明によりて自己を制裁するの力あり。また苦憂なきにあらず苦惱あればこそ歡喜光を仰ぐの要あり。常に罪惡苦惱と健闘して不斷光によりて勇氣を鼓舞し此生涯は煩惱と奮闘の生活である。已に靈化しぬれば昨日までの苦もまた苦と感ずるほどのことなし。此土一日は淨土百歳より勝れたり。何ぞそれ何の苦かある。今は理想の淨土に在りて生活し而していよく命終らば實在の淨土に生ず。

斯の如きは是精神的光明主義である。佛陀禪那は光明主義の豫言者である。

## 二百十五

此ころ來のあつさはやかるゝばかりにも感じ凌ぎがたきよと獨りかこつ身の愚さ。つらくおもひみれば、過にし年は天運の御都合もおはせば或大患を救ひ給はんがた

めに此地にすめる子らには止むなく水のわづらひをも負はせしを憐れみ給ふ 大ミオヤの御慈悲のやる瀬なきより今年はいのちねなる稻をさかえしめて子らがために糧の乏しきを救ひ給はんとのふかき聖意のほど成るより、熱を與へ給ふことの御惠の實に／＼量りなきをもわすれて、あつさをかこつことのあさましさ。このあつさを與給はずばいかでか米を饒はしぬることを得べきぞ。

流るゝ汗に身の垢つきけるを、浴みて垢を除き去ることの快さを感しながら、よりは／＼けがらはしき心の垢をばさまでにもいとほぬことはいかなればきよき光の八功德池に心を溶すればいかに快なるぞ潔なるぞ、八功德池はよそならで聖き名によりて清き光を溶する時は我心、自ら清く潔く澄淨にしてかたちなきごとく八面玲瓏としてかぐはしさいふばかりなく、感情の靈感深く味ふ時は甘露のごとくにして潤ひ澤なり。清淨光八功德池にすみあそぶころのすがたはいかにぞある。大ミオヤの念ひの廣さ深さ、いかに曠天大なるも御念ひの充せざる處なく、いかに大地厚くとも惠

みの塞ふさがる處ところなく、天地てんちはことごとく 大ミオヤの聖意みせねの満みたせ給たまふ所ところ、何なんの處ところにてか 大ミオヤのみこゝろをはなるゝことを得えべきぞ。

智慧光ちみくわうとは此天地間このてんちかん一切さい萬法ばんぽうに於おてことごとく一として眞理しんりの法則はふそくならざるなし。それを覺知かくちせずして無明むみやうの中なかにくらすなり。いかなる微細びさいなる植物しよくぶつでも生理せいりに於おてことごとくまたがぎりなき理りが存ぞんせざるなし。いかに亘いんせうなる蟲類ちゆうるゐにまであらゆる無盡むじんの能力のうりよくによりて造化ざうくわせられたり。故ゆゑにこゝろを注そぎて觀くわんする時ときは一として智慧光ちみくわうの照てらさざる處ところなし。

## 二百十六

過すにし頃ころの御好意ごかういかたじけなく謝しゃし上あげ候さふらふ。さては御信仰ごしんかうの殊勝じゆしやうなる御こゝろざしの優美いうびなる法はふのためうれしくもまたしたはしくもおもはぬ日もこれなく候さふらふ。御別わかれせしより北きたの海路うみぢのもろ人に結縁けちえんいたし歸かへり路みちの物ものがたりを樂たのしみ候さふらふに、豈あはか

らんや越路なる新潟高田などの各寺院よりの請によりて止むことを得ざる事情かしこへまいり遺憾に存じ候。而して本月八日ごろ歸京いたし候へ共、少しく病魔にさへられて、このごろは心しづかに療養いたして、さしたることにてはこれなく候へ共わゝるくせぬやうとの、ひとくくのすゝめにより恣まゝに攝生いたし居り候。

貴姉さま御時候の御さはりみなさまいかゞ案じ居り候。

渡天、日清事件のため少しく延期のつもりにて其の前いま一回のあふさかの關を越してかしこにわたる船のともつなをとくことにもならば、今世より後世一蓮托生のあしたを期しての御ものがたりなどいたしたく候。

## 二百十七

過ぎぬる晦日のけむりの車にて京を後に見て下つ毛の國西那須とやらこの停車場より鹽原でふ山家の温泉に遊び病をいやしなどして、途すがら清原草深うして風に香

あり氣涼にして此身をたすくるに似たり原野を経て山間に入れば千巖競ひ秀で、萬岳  
争ひ流る山色流音をともとして、すなはち鹽原につきぬ。

朝まだき山の邊をながむれば樹葉も山あらしのためにしほれ夕ぐれのころほひ吹く  
風の音すさまじく、もはや秋つきの殺風人の感をひやゝかにす。神を放にす青雲の  
外、跡を絶す窮山の裏。

自然の瀟洒蓬萊に勝るなんとおもひて年命の日夜に去ることを覺らず、一枕邯鄲別  
に天ありといふて無常念々我を挽くことをしらず、朝に薰沐してひとへに西方の願王  
を讃じ夕に稽首して専ら彌陀の慈恩を謝禮す。

思を西方に遊ばしめば松風ことゝく微風吹動諸寶行樹、乃至、羅網出微妙音のし  
らべに擬想す。心を淨土に回すれば山水流音もみみ五根五力七菩提分の音かと聞きな  
す。

我がおもふかたをいかにとながむれば

しほやが原に秋風ぞ吹く

山水の音きゝつゝもおもひしる

ながれの末やいかゞならんと

## 二百十八

宗教傳播につきて眞實と方便とあり。方便とは方法便宜にて能化の師より所化の人に宗教の必要を感せしめ求道心を發す處の動機を興ふこと、また宗教心なきものゝ爲に或は演說等によりて人は宗教なくては終局の目的も明かにならずまた人生闇の中にくらすは淺ましきものであるといふことを自覺せしめ、いかにして其明かなる道を得られんものぞとの求道心を發さしむるは方便にて而していよく求道心が發りし上は能化の精神の奥に常に燃へつゝある信念の光明の火を求道者の信心に點するのであるこゝに於て今貴姉に望む所はこゝにあり、方便としては他より教師を請ずるもよし、



演説師を聘するも非にあらす。然れども眞實の信念即ち眞髓の段に至つては貴姉が常に自己心中の奥に活躍し在る靈の光明を其のまゝに同胞等に傳燈するにあり。それにも自己の信に至誠熱注せざるべからず。自己が全く如來の心光によりて自己の奥を支配し自己之によりて恩恵を感じ。此光明によりて靈活し活動し、之を以て自己の靈命を成すならば同胞にもまた之を頒つべし。

つきてます。自己罪惡を懺悔し如來の靈光に充たされむことをいのり、常に如來と離れざらんことをいのり。而してまた同胞も自己と同じ信念の生活となるやうに、即ち今千代子に肉の千代子と靈の千代子とをわかつて肉の千代子はつひに北茫の塵と消えざるを得ざるも靈の千代子は永遠の生命である。光明である。如來の分身である。靈には實には千代子といふ名はつけられぬ永遠の眞理である。其肉の千代子とすべての同胞等とは各自十四元素は同一なれども形氣の質は特殊的に受けてゐるなれども其精神の奥に於ては如來の靈光に感化せらるべき性を有つてゐる。其のうける靈光に

よりて何人も靈の生命となることをう。只傳播につきての方法は如來の靈應身ともいふべき光明相好に注集せしむるが眞徑ならむ。何れにしても千代子を幾人も出来るやうにするのが眞實の傳播である。自己の精神に燃えつゝある光火を同胞にうつすことを中心とす。若し之を離れての傳道は無意味である。

先づ世につきては其一家が本とすべし。家に在つて同一の信仰團の光明によりて靈活するやうにして、またすべての親近せるものに及ぼし漸々に數多の同胞に及ぼさんことを希ひ候。

全く如來は吾が大ミオヤにして吾靈は如來によりて活けり、若し如來を離れなば我なきなり。如來と連絡せる心の奥へは無限の泉源より湧出して我が靈を活す。吾が靈の電燈は如來を發電とする故に永遠に盡きることなし。

如來。宇宙に永遠なる如來の光。明は此地球の人間に人格に現はれては釋尊の光顏巍巍諸根悅豫姿色清淨と現はれまた善導大師の念佛すれば口より化佛連發し法然上人

の胸中に充てる靈光悉く是永恒存在の光明が人格現たるに外ならず。

永遠の靈的電力は一切處に遍在せざる處なきも電機の設備装置ある所に發現す。

光明を益熾ならしめんと欲せは只須らく一心に念佛すべし。若し冥想觀に入つて

心念を凝らしましては口稱三昧に入りて神を凝しなば三昧發現せん。三昧とは如來心光と衆生の心とが一致する所なり。我が信念の所に如來の電氣が發現するなり。

感情に於ては入我々入即ち如來の恩寵は吾が胸中に存在してつねに暖温を發し我は如來恩寵の懷ろに在りて感謝禁じがたし、慈悲の温容 寝ても離れずなさけふかき面かげはさめてもわすれがたく朝な夕な佛を懷いて起き夜な夕な佛を懷いて寐ね、我いかる時は我をなだめ、我憂へ悲む時は我を安慰し、我と共に行き、我は幼き稚子なれば、如來は我が課業となり我躓けば如來は我ををこし我をたすけ、我は動ずれば危険に陥らんとする時は如來は我を危きにたすけ、若し我厭世觀を起さば如來は娑婆即ち淨土と現じて我を生しむ。

我は自ら好んで罪惡を造る。如來は強き本願力を以て我を淨土に誘ひて、我は自分勝手自ら獨立して衆生を離れんとするも如來は吾と同胞と和合して共に幸福を喫ばしむ。我は中途にして慈父の手を放れて徑に迷はんとするも、如來は我を撮めて淨土に歸せしむ。

あゝ慈しみの深き吾が大ミオヤ。

## 二百十九

佛世尊成正覺の佛陀伽耶および、初轉法輪の鹿野とう拜禮し畢り候。かたじけなき言の葉にあまり候。弟子曠却來の幸と存じ候。幸にして身體すこやかなれば心安心下され。もはや歸路ブルマ安南還ふまはることにしさりとも三月は歸國のつもり致し候。後にまた。御本家によりしく御傳聲。

明治二十八年一月三十一日印度カルカッタにて。

## 二百二十

禮讚に、人間忽々として衆務を營んで年命の日夜に去ることを覺らず、燈火の風中に消えなんこと期し難きが如し。忙々たる六道定趣なし（乃至）力めて常住を求めたまへ。

時間（命）はやすみなしに進みゆく。消極的であるが、なかに積極的に精神に不可思議の無量光と壽をあらはれんことをいのりなされ。

信心まことに得る時は此の身このまゝ如來のみひかりのなかに日々の家業なす。されば今日もこの仕事をば如來様より仰付けられたものとおもふて、かたじけなやとよろこびて、御恩ほうじの名號をとなへなされんことまことの信心と申すことにて候なり。あなかしこ

## 二百三十一

大ミオヤの光明の中にいかに御暮しなされ候哉。如來は宇宙萬有の大御親にて在ます。如來は我等が心を照し玉へり。我等が如來を念じ奉る所以は、如來の心光を仰いで我等が闇黒なる汚穢なる罪なる心を如來に清められ、我等が心を靈化し玉ふ。また我等は日々に此の肉體が糧を要する如くに心靈の糧なくてはならぬ。我等が一心に念佛を申すは靈の養ひを要求するためなり。

## 二百三十二

つらくおもんみれば我等は生死流轉の凡夫、曠劫よりこのかた、苦海のなかに沈みつゝ、いまに於いてなほ出離のみち猶得がたし、しらすくらきよりくらきにさまよひ、苦より苦に入り、彼こに死して此に生れ、只眼前の名利にまよひて、一大事の要

路もとむるこゝろざしあま浅く、草露くまつゆのもろき身みをかへり見みず、無常むじやうの日夜にちやに命いのちをやくこ  
とをはからず、朝露あうるでんくわう電光のすみやかなる、我身わがみにあて、見みずんば、はなはだあやまり  
なるべし。入出でいりの息いきをさへうかりとはならざるなかに何ぞなんいたづらに光陰くわういんをすてるこ  
とをおもんばからざらん。おもへば〜我等われら何なにの幸さいはいなる哉かな  
阿彌陀あみだ如來にょらいの本願ほんぐんに乗じやうじ、煩惱ぼんノウ具足ぐそくの凡夫ぼんぶそのまゝに、智慧ちゑをもみみが、ず、定ぢやうを修しゆ  
せず、戒法かいほふをだもたもつこと能あたはざる淺あまましきもの、この罪惡ざいあく生死しやうじの凡夫ぼんぶを、容易まういな  
らざる地上ぢじやうのぼさつすら登のぼることの出來できぬ報身ほうしん淨土じやうどへ、往生わうじやうすることは、螢ほたるほどの光ひかり  
もなき身みより日月ひつきにまさる光ひかりりをはなつ身みとなること、石いしや瓦かはらが變へんじて黄金わうこんとなるこ  
となれば、これに過すぎたるめでたきことはなかるべし。そのかたじけなさを忘わすれてい  
たづらに月日つきひをすぎることはおろかにて候まふらふなり。ねてもさめても稱しやうみやう名なをわすれ給たま  
ふことなかれ。

拜啓もはや夏の初めにも入り、此程來は暖もすぎて少しく暑く相成候。實に光陰すぎゆくことのいと早く、寒さ往ぬと思へばはや暑は來り、明る日もく空しく暮し、來る年もくも徒らにすぎぬ。古人がいたづらに我身世にふるとの歎きも今さらに思はれて候。しかれば此世のことはよくく心をとめて見れば、一ツとしてわれに、世は苦なり空なり無常なり無我なりといふことはりを、さとらせて、まことの常住にしていつも變ることなく、安穩快樂なる無爲の都、清らかなる西の彼方なる御ほとけの國に到らずば、いかでか安んずることのあらんやおもひしらせることはりにて候。已に信心開發して、平安と清きとを與へ給ふ御佛の光を受けて、その光明の中に心はすみ遊びぬる時は、假令身は苦空と無常無我なるに似たれども、まことに佛陀を信する心は、已に安き光の中なれば、おもへばその御心にかゝる浮雲やあらん



むかし。未だ信心得ざる時の憂と今信心得たる後のうれひ、似たやうなれども甚だ異なりて候。何も浮世のならひとして、ふつと心にかゝる雲いでぬるかとおもふとも、南無といふ聲の、心の空には、阿彌陀佛の皎月さやかなるおもひ、それはの心が、りも、取なほして、佛の平安の光をおもふなだちと思へば、憂もやがて、一むら雲の月夜の一人のなぐさみともなりぬべし。また樂しきこと、とても、昔のいまだ信心得ざる程の樂しみは、五欲のほだし、却て苦しみの因をもて樂しむとせしなれば、樂しみと思ふうちからも、よくく意をとめて見たならば、そら笑ひする心の底には、ためいきの憂ひや潜みて在ぬべし。信心得たる後の安きと樂しきとは、今も後も思へば彼の無量壽國に生れてかの佛のまのあたり法をき、菩薩聖衆と共に語り合ふこと今思ふのみすら、なんとなく踴躍の想を起す。しかし、心の底なるおく主南無阿彌陀佛は、生死をすぎ去りて無量壽佛にましませども、直ちにこの罪惡生死の身の方に、心を轉じて見れば、刹那々に無常にせめられてしばらくもとどまる時こそなし。

善導大師の御言葉に

歸りなん、いざ魔郷にはとどまるべからず、曠劫より以來流轉して、六道皆悉く經たり。到る處餘樂なく、但愁歎の聲のみを聞く、此生を畢て後かの無爲の域に入らんと、御誘ひの御言を力にてし念々不捨の御稱名相續あらんことを乞ふ。これまでは佛様よりの御取つぎ是からはまた此の世の佛様につきての事、是は宜敷御つたへ下され度候。

## 二百二十四

歡喜光のなかにまた功をつもるべき年をつもり目出度御祝申上候。舊冬十二月下旬出立の際には（灰冬來り）御たのみして御藥有難ふ御禮申上候。愚衲は通路藤枝によりて小西といふ信者に久し振りにて會ひて信仰の話を致し、三日の後當地へこして候。神宮寺にて無最壽經を信者に十五日間ばかり講説して昨日當寺へまいり候。

聖經の一二節をぬいて和解して御はなしを致しましやうからお聞きなされ。下巻に

又其極樂の微妙安樂にしてまた清らかなることは、是まで委しく聞かせた通りである  
何にしにうか／＼して、この精神を無上のよきことに用ひないのであらふ。人々の靈  
魂はもと、萬物の源なる彌陀如來の法身よりいで、今まで迷ふて居ただけれども  
今進んで、如來は萬德圓滿の報身の善美の光明をもて照し給ふのであるから、もと眞  
の親にそむいたから長く迷ふて苦しむを受けて居つたけれども、こゝで之を聞いて彌陀  
の慈悲に歸命する心になりし上は、他人の所に行くわけではない眞のさとの親のも  
とに行くのであるから、道の自然として行かるゝのである。著なれば上下なし、  
洞達して邊際なしとて實に著らかではないか。著らかとは心がもと信心開けざる時は  
肉體の外に大切なものもなく、心は闇の中に暮して、阿彌陀如來のめぐみの光の中  
に居る身であるとは知らずして、假の身を眞のものぞと思込んで、心靈は闇で一向す  
てられてあつたのが、段々如來の光に照されて、如來御光の中の日暮しと著らかに心

が出たではありませぬか。信仰の開けない昔にくらぶれば、夜が明けた様なものでせう。信心さへ全く出来れば、からだにこそ上下のへだてあれ、彌陀の光の中には、少しも上も下もなく、信仰開けさへすれば、洞達して洞かに、彌陀如來に心はいつでも通るではないか。念々如來様に通りどふしではないか。なせに つとめて、之を自己の心のうちに、一心に如來様に向つて求めないのでせう。必らず超絶たちこえて、去つて安養國に精神は生るゝではないか。又からだまで生れ更るは後の世であるけれども、精神だけは、一心に念ずればこゝに居ても生れかはるではないか。之を知らぬ人は此世から心は六道に流轉して、また次にはからだまで三惡道に更るではないか。如來を念ずれば、惡趣自然に閉と云ふて、此世から惡趣の方に向ふ心は、  
ます  
は貪欲餓鬼の門口にのぞんではまた瞋恚の地獄の方へ心の足を向け、愚痴の畜生道に踏込み、憍慢の修羅、勝陀のしゆら、日々六道の道中にある迷ひものを、如來なればこそ、南無阿彌陀佛の聲の下に、心の足をみひかりに向はせてたまはるでは有ませぬ

か、昇道とて毎日々々御名を唱へ唱へ、日々あなたのみ光中にあつて、一日々にすゝみて近くなるのです。目にこそ見えね御浄土の方に念々に昇りすゝむのです。

往き易くして人なし、其國逆違せず、自然のひく所なり、と。本と人々の心靈は法身の彌陀如來より出て、本心の奥は極樂を願ふ善なれども、生々世々の迷のくせが容易にぬけ難くして、往き難いのです。其の國逆違せず 自然の引く所、自然で有るから、精神に尋ねれば本心は極樂を願うて居る。なせなれば、死ぬがよいか死なぬがよいかと自分に尋ねれば、死なぬがよいと答ふ。年も老いず苦もなく心の悩みあるがよいか否やと問はゞ、不老不病不苦を望むと答ふるでせう。尊きものがよいか賤しきがよいかといはゞ、尊きものと答ふるでしやう。然らばなせまた不老不死にして身の苦もなく心の悩みもなく尊きものとなることの出来る浄土を願はずして、いや の娑婆に執着するのしやう。さればとて命を捨て、極樂へ行けと云ふのではありません。精神だけは此世から、彌陀の懷ろの中に安らかに、清きみ光にて六根自ら清らかに、

歡喜光の中に喜ばしき平和の日暮しが出来るのです。自然の引く所ではありませぬか  
自分がもつ法身の如來さまから受けた本心を名を稱へて開くのである。信心開  
くる時はいつもありがたし。願に

かぎりなきめぐみのなかにすみぬれば

ねてもさめてもうれしかりけり

さて長ばなしになりますけれども、世間の人々にして自己の心靈のまことの親を知  
らずして、己が心にせめられて、苦しき日を送る人々は、どうか親の深きみめぐみを  
知らせたく、なされ候。人々自己の本來の親を知らずして迷ふなり。親の慈悲の懷を  
出で、自ら苦しむ。如何に愚かでしょう。天にも地にも充わたりてし親の懷を、どう  
して出で居つたのでしやう。心を一寸ひきまはしてすみかへたことなら、如何に有が  
たき日を暮されるでしやうに。いかに不孝の子たちが多いのでしやう。

なやましき心こころひとつをすみかへて

樂たのしき親おやの懷ふところに居をれ

昨日きのふまで鬼おにの栖すみかの胸むね殿どのも

今日けふ彌陀尊みだせんの御堂みどうとはなる

まごころにみ名なよぶひとはおくゆかし

まごころのそこに彌陀みだはまします

二百二十五

水中の月影をとどめえず、雲の電とりとめがたく、世にはかなきいのちのほどをかへり見て、念々わするべからざるものは、念死念佛の二念ばかりにて候。されば經には、一切有爲の法は夢幻泡露の如しと。然るを知らずして世の中の人寤寐のあいだにも唯名利の二つのみを希望し、あだなる榮花に望みを發し、あさましく。佛子いかにこゝろを安置すべき。かの本願成就のアミダ佛は、萬徳圓滿のよそほひ新にして、常に十方の世界を照らし、無縁の慈悲遍く照して、念佛の衆生を攝取し玉ふ。口常に佛を稱ふれば佛は明に之を聞しめし玉ふ。身に佛を禮すれば是を見給ふ。身は肉眼の穢土のよろづにけがされもて心は常に彌陀の心光に攝取せられ、行住坐臥にこゝろにわすれざるかぎりは彌陀は面前にて候。

さて其後は打絶て音づれを通せず、しかしながら心にはさすがわすれ得兼。かた候。此程さる人よりつたへ聞きはべるに初春のころは病魔のためにさへられ候由



目下いかゞに候やらんと案じ居候。元より三界無安、猶ほ火宅の裏なれば、ひたすら安養の淨土に神をすましめ、彌陀の心光に心を安んせしめ、寤寐の間も心のつまにかけ、わすれたまふな。

彌陀身色如ニ金山一

相好光明照三十方一

唯有三念佛蒙三光攝一

當レ知本願最爲レ強

光明遍照の相に思ひをとゞめいつもわすれまじく候。若し佛の光明をよそに見るほどは、凡夫の癡闇三途にむかふみちにて候。されば禪祖の語に、前念迷へば是凡夫、後念悟れば是佛と。いまもまた然り。前念自己の心は是凡夫、後念彌陀佛を念ずる心は是佛にて候。いつも彌陀の大光明は念にかけて忘れたまふな。口稱一行の三昧も日に三十分斗りにても勤められるかぎりは御つとめ候はゞ、その功德つもるに随つて三昧樂を得る。その快樂は自から無爲にかなふ。世にたとふべくもあらじ。また自信教レ人信、難中轉更難、大悲傳普化、眞成レ報三佛恩一なれば、なる

べく因縁のある人々には御すゝめあるべく候。たとへかりの身は在家にありと云ふとも、念佛心に安するかぎりは、是當坐道場、即ち彌陀の尊前にして、たとへ身は空閑定靜に處すといへども、心に世を希望する時は、六道のさまよひものにて候へば、よしや此のかりの身の爲には、兎にも角にもなしぞかし。かへすくも阿彌陀佛ばかりは、つかの間ほどもわすれたまひそ。

## 二百二十六

ミオヤの大なる御めぐみに感謝上る

一月參堂の砌りはよろずかたじけなく謝候。そのうち寒さもきびしくありました。が此頃ようやくゆるやかに相成りました。御老母様にはこの頃いかゞにて候や。私一昨日こちらへ出張いたしました。

御名をよぶ聲にいつしかすむ水の

心にやどる月のおもかげ

衆生信心の水すむ時は如來の尊貌やどること月の影水にやどるがごとし、

今日のいのちは全く如來のたまものなればまごゝろにつかへ奉ることにして居ます。如來のみひかりの中をむだに日をくらはしてはなりませぬと私は信じてよろこび生活して居ます。

ますく攝取光明中にすべての人々をおさめ入られるように御つとめを願候。

## 二百二十七

華嚴經もよほど書寫いたし候。是より小金に御經をとりにまはり、松戸來迎寺に於いて書寫致すつもりなれども、小金になるか又他所になるかは書寫する所は如來様の御意にまかせて、いづれ本月は孟蘭盆會なれば、盆中には誦經のため松戸に居れば參上するつもりなり。吉田市五郎様其他の御方によろしく御傳聲下され度願候。

## 二百二十八

此ごろ勝れざる御天氣に鬱陶敷候處皆々様御氣嫌よくあらせられな、めならず賀し  
 申上候。此程は小金より態々おまはり下され、其時分は小僧例年の邪氣におかされ  
 調度お出にて御心配にあづかり候。さりながら御蔭様にてはやくに全快に相成候。  
 しかし御經の中にも、盛者必衰、生老病死の世の中なれば安然として日を暮すべけん  
 や、よつて日々に御經を書寫おこたりなく相勤め候。この劇惡極苦の中に於て勤身營  
 務して、共に不急の事を諍ふよりは、世事の虚き事を精神に 勤行して道徳を求め  
 て極長生を得、壽樂極りなき淨土而已偏にねがふのみ。思へば辱なきは彌陀の本  
 願、行住坐臥、不問時節の久近、念々不捨の南無阿彌陀佛。

## 二百二十九

月日に關守なくもはや今年も秋の半を過にけらし御經にも。愛欲榮華は常に保つべきものにあらず、皆當に別離有べし、眞實に樂むべきものはあらじと。しかしながらたゞ此中に於て、まことの樂しみは、みほとけのめぐみを外にしてもとむべきものなく候。同縁同行願くばみめぐみのなかによろこばれんことを。

## 二百三十

恭々しく新年を賀し奉り候。舊年は萬の事かたじけなく御禮申上候。くりかへし々年は改まりつゝも同じことのよふには候へども、身は年々にうつりゆく世の定めなれども、心は量りなきいのちのたふときみひかりの光に、清淨光の徳にて穢き心の垢も清らけく、かきくもる日のころも御名によつて歡喜の光にあふことを得る。

願くば今年も歡喜光の中に不可思議功德をつもりつる日をおくり度祈る。

二百三十一

新しき清きみひかりの中なかによるこばしき年としをむかへ候まふらふ  
じけなき感謝かんしゃの生活せいかつをいのり候まふらふ

更さらにすゝみて日々ひびにかた

二百三十二

うつりゆく時ときと我身わがみはうつるとも

こころひとつは南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

なんのかのおもふもいふも無益むえきなり

たゞくたのむ南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

むだやこゝとをいふ口くちいらぬ

たゞその口くちで南無阿彌陀佛なむあみだぶつ

南無のかんのといひわけよりも

やはりかほりに南無阿彌陀佛

近みち、何よりもやすし、はやし。たゞく申してくく、くくしつきる事もなし。都でもいなかでも行住坐臥其外の事は一大事ではありません。

二百三十三

如來の大なる御めぐみを感謝したてまつる。

拜復 御端書によりて慟哭して止む能はざるの訃音に接せり。ア、天なる哉、命なる哉。

民賢者、有餘依身を脱して無餘涅槃に歸入せりと。まことに働するゆるむのものは俗に所謂る愚痴にあらずして吾道の爲なり。

民賢者、先年來一に如來三昧を行じたりき。曾て常に神を淨土に栖遊せし如くなりし。

神恒に涅槃に安住せり。脱蟬の後焉んぞ淨土にあらざらむ。築、晨に焼香合掌し聖き名によりて民賢者の莊嚴淨土の冥社をいのり、昏には靜座攝心して眞境に入り玉ひし賢者の生存の交誼を追懷憶想す。先師民賢者つとに、普賢の願望を抱き、勢至の意志を懷きて、いま又淨土に歸入せり。久賢者よ、願はくば大に戀ふべき處の遺志を紹ぎ斯道の爲に盡悴し、淨土の金蓮臺上に安座したまふところの聖慮に手向けられんことを。

民賢者かたちは本の元素に歸還すとも、普賢の志は永遠に朽ちず、後昆の身に再現して世を救ふはまた疑ふ可からず。

辨築、御訃音に接してより直ちに趣き度しとは存候へ共來月十日頃までは、三ヶ所ばかりにて講習の準備も整ひ居候へば思ふまゝにならず。實に遺憾なるは折角に出來



揚りたる普賢ぼさつを直ちに淨土に送り申したることよ。

來十日頃には歸京候御面晤に萬々可申上候。

(民賢者は原青民師)

## 二百三十四

聖徳太子の念佛法語に、念佛は情にありて理にあらず。風人の月下に我を抛ちて萬邪皆忘れて聖理にかゝはらざる如し。

實に然か思ふ。假令いか程理論の上には有神論が勝利を得、彌陀の實在の理論を巧妙に論ずるも、未だ眞に信仰の眞髓を得たりといふべからず。若しそれ自己の全生命を彌陀の中に獻げたるのみにあらず、大慈悲の懷に融合して、小我は融け込みて、たゞ自づとかたじけなさに、南無阿彌陀佛くと御名を稱ふる外なきに至る處に念佛三味の妙趣感じらるべく候。

また哲人カントが、宗教は感情的實在、執意的實在にありといふも、太子の法語と

同一の事に相成候。

良に惟んみれば、彌陀は今にはじめて縁のむすびしにあらで、實に彌陀は心靈の大慈父にして、久遠劫來、久しく御別れしてより、慈父のいますとも思はで、たゞ六道輪廻の迷子となりて、幾ばくの劫數を經にけん。

宿命通なき凡夫の悲しさ、へだたる過去の昔を知るに由なし。若しも此度空しく經もせば無窮の生死に沈む外なきを。

大慈の父は子を哀はれむの遺る漸なさに、むかしは法藏となのりミオヤの慈悲子を思ふまことを示し給ひ、又近くば釋迦牟尼と號して、慈父のなさけ貧里に迷ふ窮子をあはれみ、慈父のみ許にひきよせて、無量の財寶悉く附屬し給はんと思召し給ふ。

釋迦のみをしへに依りて、つらくおもんみるに、彌陀は吾等が心靈の大慈父にして、久遠劫來わかれし子を、しばしも忘るゝ間なしと仰せらるれど、子は左とも思はで久しく經にけるを

みおやの慈愛の暖かなる靈氣にもよふされてや、未だ曾て經驗せし事なき感情の奥底より萌え出づるえもいはれぬ一種の靈感こそは是なん みおやにあたゝめられたる深き情に心靈の萌發となりしとこそいはめ。

みめぐみにあふて、靈の信根既に生じぬれば 大みおやの慈悲の育みはたへず蒙りて常に感情的に血の通ふ暖かなるおや子のなさげにこそ是なん活ける信仰にて候。されば、中井家のあたゝかなる慈悲にみたさるゝ家庭に、遠からぬ程に信心の花開きて、常盤かきはに咲き匂ふ心のなかに、靈感極まりなきを覺ゆる日の來れかしと、聖き名を稱へて祈りまつりて。

中井家の庭に床しく匂ふ白と紅の蓮の花よ、

白きはいと清き心の花なれば、そをもて妹をきよきみもとに誘ひて給へよ。

紅なるは赤誠なれば、まごゝろをもて、脊につかへてたまへよ、觀音菩薩と勢至菩薩とし 大ミオヤに事へまつりてたまへよ。

## 二百三十五

光明家庭の心得

- 一、父母は慈悲と正義の觀音勢至にて實行の範を以て子女を光明に指導すべき事
  - 一、各自に闇黒の氣質を淘汰し光明の本心に基き平和たるべき事
  - 一、怨恨等を發し衝突を爲すは光明を失ふ故なりと覺知すべき事
  - 一、光明に充されてはいかなる場合にも麗しき色を變へざる事
  - 一、光明の時間を貴重し徒らに過すべからざる事
  - 一、日々の業務は如來の命令と信じ潔よくつとむべき事
  - 一、如來の試験は日常行爲の上にある事を記憶すべき事
- 晨には今日一日如來に身心を獻げて事へまつることを告白し、夕には一日いかに行為せしやを吟味し益々向上せんことを要す。闇黒の家に犯罪の卵子は發生し、光明あ

る家庭に善良の士女育成す。聖典に悪人は悪をなし冥より冥に入り苦より苦に入る、善人は善をなし明より明に入り樂より樂に入ると示し給へり。

## 二百三十六

大なるミオヤは十劫正覺の曉より、可愛き子を待ち詫び玉ふとは、假に邇きを示せしもの、實には久遠劫の往昔より今時の今日に至るまで、可憐き子の面の見たさまた子を思ふ親の心の知らせたさに、番々出世の佛たちを御使はしなされて、苦心慙勸に子らに諭して、ミオヤの大悲の御手に渡し玉はんとせし、久遠劫來の思念がかり、大悲招喚の御聲に預かりし田中道士の、至心信樂の心を注ぎて慕はしき吾が大ミオヤ、ナムアマミダ佛と呼ぶ聲を、毫も遠からぬ道士の前に在ます大ミオヤはさぞかぎりなき歡びを以て之に報答しますらんと信じられて候。

道士よ、御名を呼べば現に聞玉ひ、敬禮すればアナタは靚そなはし玉ひ、意に念ず

れば、アナタは知り玉ひ、こなたより憶念し奉れば、アナタは幾倍か深く憶念しくださるゝとの導師の指導にして誤りなからば、今現に念佛三昧を修しぬるに

大ミオヤの慈顔に接することを得られぬことゝかくな思ひ玉ひそ。また今現に大慈悲の懐ろの裡に在ることをもゆめな疑ひ玉ひそ。

此肉體に於いても分婉せられてまだ幾日の間は母の懐に抱かれて居ながら懐かしき母の容を見ることができぬことにて候。

しからばいかにせば吾母の容を見ることを得るに至らんとすれば、啼く聲に哺ませらるゝ乳を呑む外にはぐくまるゝみち之なきことにて候。

念々彌陀の恩寵に育まれ、聲々大悲の靈養を被る。

十萬億土遙かなりと愁ふること勿れ、法眼開く處に彌陀現前す。

今宵は大晦日の夜である。世人多くは債鬼をのがるゝに苦みて居り、道士は無始以來迷來の債を除いて、久遠劫來の親に逢ひたさに泣いてゐる。道士よ、今宵は無始以來迷

ひじまひの大晦日おほみそかにして明あくれば、本覺ほんかくの無量壽むりやうじゆにして無量光むりやうくわうなる元旦ぐわんたんに候まよらへば、萬ばん歳さいを以もつて未いまだ足たれりとせず、無量壽むりやうじゆのみ名なを稱となへて、道士だうしの聖せいなる元旦ぐわんたんを祝しゆくし上げ候まよら。

## 二百三十七

如來にょらいの聖意せいいに清きよめられ、聖寵せいちゆうによりて清きよきに生うまれ觀音勢至くわんのんせいしの勝友じやういうに圍かこまる、泥中でいぢゆうの白蓮びやくれんたる高橋優婆塞たかはしうはそくにまで白まをす。實じつに希有けふなる上善人じやうぜんじんよ。此三月三昧會中このぐわつまいをちゆうに斯この芬陀ふんた利華りけを白衣びやくえの中に發見はつけんすることを得えたりしは深ふかく如來にょらいに感謝かんしゃせざるを得えぬことにて候まよら。白衣びやくえの菩薩ぼさつよ、其折申そのをりまをし述のべたる如ごとく機教相應きけうさうおうとは佛教ぶつぎゆうの格言かくげん、彌陀みだの大悲だいひも白び力りき教的てきの輩やからには只現世祈禱ただげんぜきとうの稱名しょうみやうと信しんず。されば山家さんげの大師だいしも現世利益げんぜりやくには念佛ねんぶつに如ごとくはなしと教をし給たまひ、又百萬邊またまんべんの念佛ねんぶつは息災延命そくさいえんみやう病速消滅びやうそくせうめつの功德くどくありと識しるされたり。次つぎに超自然教てうしぜんけんぎゆうの人は彌陀みだの本願念佛ほんくわんねんぶつは死後往生しごわうじやうのみの特效劑てうくわうざいの如ごとく見做みなされる。然しかし

ながら彌陀は絶對無限の大威力、無縁の大慈悲者、圓滿の徳不可思議者なれば、若しは現世、若しは未來と云ふ局限あるなし。そは相對的に規定せらるゝ所の人間そのものに有する偏見のみ。絶對なる如來、何ぞ夫れ過去現在未來の局限あらん。开は人間自から障壁を造りて自己の要求を願ふなり。されば自から我等は逆も現世に於て證入の分にあらざれば、せめて此肉體の壽命終りてのちこの靈を極樂の淨土におくることを期する人の爲めには彌陀は死後の大慈悲者と見え、また現在より如來の大光明中に靈的生活を要求する人の爲には絶對なる大光明者は歡び迎へて光明中の人となし玉ふ。淺きせまき人の心を以て絶對なる如來を見るは半面より窺ふこと能はざるなり。されば我等は第三期の絶對光明中に現在を通して永遠の光明界の人となることを期す。何れを是とし、何れを非とせんや唯その機に隨つてその見解を殊にするのみ。



先日祖山三昧會より歸來の後或信者よりの間に、先づ頃三昧會中一方の教師は唯往生極樂の爲に口に名號を唱へよ唱ふればその功德にて死後に往生すと教ゆ。一方には只偏に絶對的の大人格なる如來をば御名を通じて大人格に接せよ、現に靈に活きる如來の靈の光明に觸れて現在より活きよとの教の中、何れを取るべきやは吾人の大いに惑ふ所なり。余は之に答へて云はく元來如來は絶對にして現末の差別なし。然して我等は本願の念佛に依るとは、本願の念佛とは、我等が南無と呼ぶ聲を現に聞き玉ひて直接に報ひて心光を以て我を光化し玉ふ如來を念ずる所に本願の意義あることを信す。今現に我らが肉體の活つゝあるは現に我らに光熱化を與へ給ふ太陽の力あればなり。その如く現に念ずる我らが心靈に對する太陽の如き無量光如來の心光を被りて、我らが信念は靈に活さるゝなり。我らは靈に活つゝ永遠に向ふ生命の信仰である。小兒が泣く聲に慈母の乳房を與へられて靈の育てを受くるなり。されば聖善導は口に佛をよび奉れば佛聞玉ひ、身に敬禮すれば佛眼圓かに見玉へり。意に念じ奉れば佛

はこれを知り玉ふ。我らがミオヤを憶念し奉ればミオヤは我等を憶念し玉ふ。彼此の三業は親密にして須臾も離れぬなかなる所に念佛の眞意あることを教へ玉ふ。

二の導き方、甲は念佛の功德を積みて極樂に往生すべしと教へ、乙は彌陀の大人格を信賴して慈悲の御名を通してミオヤの慈光に觸れ、現在より靈に活きよと教ゆ。我らは惑ひぬ、二つの中何れに依るべきや。これに答へて、何れを是とし、また非とするなし、其機類に相應したる方に依るべし。然れども我等如き弱き拙き惡しき輩は現に離るゝことなき大悲の親を離れては小兒の育つことのできぬと同じく大悲のおや様を精神的に離れぬやうにミオヤの御育てを仰ぐ外なき者なり。おもふに彼の無爲泥洹の淨土に生れての後には毫髮の惡なき御國と聞つれば、假令如來を離れても或はよいかも知らぬ。然れども此世に於ては我ら如きはどうしても大悲の親様を離れたならば實に危きものにて候。されば我等は無量光如來を一の親と仰ぎ、ミオヤの聖意を意とし光明の御名を呼びて、あなたの光明を被り、光明の御育てに預り、光明のなか

に生活させて戴き、而ていよく命の終りには光明の御許に進みゆくことにて寢ても  
さめても光明名號を稱へて光明中の生活に入り現在を通じて永遠の光明に進趣せん  
ことをぞねがはし。されども意樂同じからず必ずしも萬人同じかれとは言はれ難し。  
宗祖法然上人の宗教的心理を窺ふに皮肉骨髓あり。宗祖の御傳と聖光上人傳書と  
を比較すれば聖光上人は正しく宗祖の眞髓を傳へられたる上の傳書、御傳は天臺の  
舜昌法印の皮相より見たる見聞の纂集なれば、正に宗祖の靈的眞髓を窺はんと欲せば、  
二祖聖光上人の宗要等に依るべしと存じ候。

## 二百三十九

肅み申上候。先日再三の御書翰に接し、他出のみいたし御返事をも上らず深く謝  
上候。先日來神奈川縣下の當麻山に滯留中、越後國淺井法順上人の訃音に接し、折  
柄授戒會中につき夫をすまし、三日夜出立し、同上人の遺言により焼香までに参り

候。聞く處によれば、同上人の臨終の立派な事は、をして彌陀の光明に誘引するの、大善知識たるの範をなされしよし。昨日歸京候てまたの御書に接し候。三昧佛承知仕候。

先日の御書に、念佛の時に心にかゝる浮雲のよし。

古人も煩惱の犬は追へども去らず。菩提の鹿は招けども來らずと。されども、いと敬愛するところの尊宿よ。煩惱即菩提なれば、肉體が最も愛するところの或對象物に對する情の深ければそれと同じく、靈の對象たる宇宙間に二つとなき三つとなき釋迦尊もその他の十方諸佛もみなひきつけらるゝ。

あみだほとけにひきつけられて、頭より爪先きまで、凡て全部を放げ込んで此世より永遠にまで離れぬやうに成りたまはれよ。されども淨滿月のみすがたを瞻まんとすれば、ますます、浮雲のためにさへらるゝことを嘆くとの事なれども、されども群り來る雲も月の光に映ろひて、一しほまた月をかざりの因縁ともならぬ限りもあらざりし

ならぬ。兎にも角にも群り來る雲の心は月のそれとは異りて須臾の間こそは月を失はしむるやうなれども、しかしそれは永しへに在るものならざれば、かまへて尊き御名を通して慈悲のみすがたに接するおもひをなす時は、いつかは煩惱も即菩提の月と成る時は必ず來ることを信じて一に彌陀のお慈悲を仰ぎ玉へよ。

## 二百四十

如來の御影を拜し云々、是につき時代と機類に依りて何れを是とし非とは定め難きも信心念佛の動機(安心)に二類あり候。甲は單に未來の幸福を目的とし乙は現在より宗教は人格の向上と永遠の生命を目的とす。甲は如來の人格を頼らず唯未來の快樂の爲に口稱念佛せば往生すと勸む。乙は自己の人格向上と人格的如來の光明獲得を目的とする故に人格的本尊に信賴す。人格的本尊の光明を仰ぎて人格靈化の願望を満さん爲なり。甲は動すれば現代の人に云はしむれば墮落し易き宗教的動機とす。人

格向上を意味する宗教には必ず人格的本尊を要す。故に釋尊御滅度の折弟子等が白して曰く世尊滅後どなたを師として弟子等が指導を仰がんと。世尊曰く吾滅後汝等展轉して行せば如來の法身は汝等と常に在り此法身を本尊とせよ師とせよと。我等は人格的本尊と常に離れぬを要す。若し如來と離るゝときは日々の心行必ず惡道に流轉す。導師の圓光徹照して端正無比なるを常に想へとの御教信すべく候。また佛と離れざる三緣實に念佛者が人格的本尊の光明を仰ぐは有がたきことにて候。

勅修御傳は宗祖は一は其時代に相應せんが爲に一は萬機普益の爲にて候。若し宗祖今日出玉はゞ現代的に人を靈に活すべく宣傳し玉ふこと必せり。

見佛と云ことは二の意義あり候。一には念佛して如來の慈光を被むりて眞に信念が生き來る時は、例へば小兒が生れた計りには親の顔さへ見へぬが乳に哺養せられてからだが發育するに隨て次第に眼も發達する故に親の顔も見ゆるやうになる。實は小兒の全體が發達する故に眼も見ゆる如く、見佛と云も實は心靈の全生命が生れ出し其兆

候として心眼の見佛と成のである。換て云はゞ活た信仰になり如來の光明に依て靈に活た兆には佛を見奉らんとの意味にて候。二には嚮に述し如く精神生活の上に常に守本尊として人格的の如來現前し玉ふとの信仰は宗教上の最も宗とする處にて候。各寺の本堂に本尊を安置し奉る所以また各檀家の佛壇に本尊を安置する所以に候。人々の信仰の頭上に常に如來を安置し各活ける佛壇を空にせずして自己の本尊の指導の下に日々精神生活行爲を爲すの最も宗教の宗とする所なりとす。斯の理を以て人格の本尊を立る所以なりとす。

我ら一度ミオヤの下をまよひ出してより已來久しく六道のちまたにさまよひ、大ミオヤの在ますことを自覺せず、空しく生死のちまたに流浪したりき。翻迷還本家の捷徑は只々ミオヤを喚び奉りミオヤの大悲を仰ぐの外なし。ミオヤは慈悲深重にして我名を喚で我を頼めよと誓ひ玉ふ。我らがミオヤを慕ふて止まざる處は、大悲の面影は彷彿として目前に在ますやうに感じられ候。我らはミオヤの絶對人格を尊崇し愛慕し

念々に尊容を想ひ、聲々に御名を喚び、たとひ肉眼に見えねども、神には常に如來の大光明照し給ふ前に在りて、口に稱ふれば如來は之を聞き給ひ、敬禮すれば如來は之を見給ふ、意に念すれば如來は深くも憶念し給ふことを常に想ふて忘れず、折々は同行相集いて三昧佛の前に於て一行念佛三昧を修し、我らが一心の金剛石が彌陀の慈悲に研かれて、念佛三昧によりて寶石の能く磨く時に太陽の光が反映する如く、我らが念佛三昧にてみがかれたる一心には彌陀の光明光耀赫耀として反映すべし。常に絶對人格の彌陀の前に在る憶念のなかには自づと稱名も溢れ出づ。彌陀は御名よぶ前に在せり。彌陀を難れざる處に我らが信念は眞實となれり。

黒き炭の火がつく時はおき火の紅赤にまた熱を發する如く、我らが煩惱の罪惡の闇黒も、如來の慈光の加はる時は、恰も黒炭に火の燃えつゝある如く、若し炭を離れて火の燃ることなき如く、我らが煩惱の心にこそ如來の慈光は燃へけれ。あな辱なやありがたや、我らが暗の心も如來の慈光によりて活され、日々にかたじけなくまた喜び



の日ぐらしをせらるゝのも、みな大ミオヤの大悲の力に依らざるはなし。

此肉體は若も天に日光なかりせばいかにして活ることを得べきぞ。彌陀大悲の日光なかりせば我らが心靈はいかにして靈に活ることを得ん。人生いかに榮耀榮花に日を暮すとも若しも靈に活るにあらざれば將た何の價値かあらん。靈に活きんと欲せば、常に彌陀太陽の光明に接せよ彌陀の光明に觸れんと欲せば常に御名を唱へよ。彌陀の名を唱ふ時は大悲の面容宛然として目前に現はれん。

願くば自ら彌陀の大ミオヤと常に離れざるに至りて、世の人々にすゝめてみだの慈光に接せしめよ。みだの光明のみ衆生を靈に活す靈力にまします。何人も一心に念佛してみだの光明に接する時は必ずきよきに復活すべし。靈に活きて始めて價値ある生命、眞意ある生活にて候。願くば大悲のミオヤに接し奉れよ。

大ミオヤの聖籠を感謝し奉る。吾いと愛する處の清き同胞なる鈴木の尊宿よ。幾度か懇ろなる御書簡に接しながらいつも御返事さへあげず實に自から慚恥に耐へず思ひます。後の御書に大阪生玉大寶寺に光明會を開設して志深き同胞衆が相集ひて、大ミオヤの慈光に接して信心長養の爲めに念佛三昧を修め、而して御互に感想を語りなさると云ふことは、實に悦びの極みにて候。

人生若し 大ミオヤの光明を獲得せず只空しく闇の中に葬り去る如きは人生の恨事此事にて候。

來月五日は恰も越前の新保圓海寺の五重を濟して明石にゆくべき道中の日なれば幸ひ大阪の光明會の同胞衆にあはして頂くべき時間は出來ることにて候。越前出發して御地に着べき時間は更に申上べく候。願くば 同胞衆に宜しく御傳への程を仰ぎ候。話は立戻りて先日御書の中に風邪の侵す處となりて惱みなされてありし御様子其後の御經過は云何に在らせられ候や。

到る所 大ミオヤの光明を仰ぐ子らの續々出るは實に悦ばしきことに候。此程新海  
にては醫專の學生十名ばかりが至誠に三昧を修すること一七日續きて毎土曜に三時間  
つとむるとの事に候。

二百四十二

光陰過逝くこと甚だ疾く先年御地に於て御別れ申して數ふれば已に四年の秋と相成  
候。

有髮仙 益輕安にして佛仙の道を修しなされ 候 事大慶此事に候。愚衲西に東に雲  
水の定めなき身只悦ぶ處は  
大ミオヤの大慈悲人の子等を憐みなされて ミオヤの光に浴して靈に復活して 光明  
の生活に入るもの、益加はる事を悦び 申候。

さて御質問の

光明三昧と云ふことは、若し念佛三昧と云ふ時は、如來の相好等を見る見佛を所業と爲す事なれば、此に簡みて光明三昧と云ふ時は、本より宇宙徧法界に照り渡る光明なれども、若し信心若しくは三昧開發せざれば、本より彌陀の光明中に在りながら自ら識らず覺らず、人生を闇黒の中に葬り去るに至る。此の三昧を得んには矢張常に阿彌陀佛の大光明中に在る身なることを念じて常恒に憶念して止まざる時は發得して光明中なる身なることを自覺するに至らん。

此光明を發得して靈に復活して初めて光明の生活に入るものとす。

若し見佛三昧と云時は佛の相好圓滿なるを見るに至らざればならぬと云時は人に依りては難きなり。光明に浴したる光明に接觸することは易し。然し見佛と云ふも光明獲得と云ふも實は同じことなれとも、佛の相好を見ざれば見佛に非ずとおもふてむづかしく取る故に難きことと思ふ。

たとへば太陽は正に見えねども、太陽の光明中に居る時は明るくまた暖温を感じる

如く彌陀の光明中に入る時は難有辱なさを感じ、また法喜禪悦の喜びと樂みを感じらるゝ。また前は闇黒な夜には世界も見へぬ爲めにせまく感ずるけれども、明て明るくなれば、天地も廣く見えるやうに、信心の夜が明る時は、光明中の生活にして、心廣く體肝かになりて、何とも云はれぬ感じを覺申候。

斯様な状態に入ることゝを光明獲得と申候。尙悉しくは片紙に盡し申難く候。約して云はゞ、自己が光明中にあるとの自覺を得るを光明三昧獲得と申候。尙申上度候へども後便に譲り候和南。

### 二百四十三

眞の靈典は大宇宙に滿ち滿てり。今日より外に心を移さず大宇宙の直説法を聞け。辨榮などの説や文章は到底直説法を寫せぬ。依つて一心專念にミオヤの御名を唱へて味ふより外なし。

御質問に對し、一問。彌陀の聖種子を受けるは云々。答。若し大乘菩薩の六種性に例する時は、(一)如來の實在を聞信し、(二)如來を愛し、(三)見んと欲すの三種性に渡る意義も有ならんも、通じて云はゞ、阿彌陀佛を説くを聞いて(アミダ經)自己本の種性が、聞名に薰發せられたる時、之が正しく正因と爲つて已に失はざるに至らば、此時に聖種は受けたるものと信じて然るべくと存候。愛又見んと欲するは、已に信心萌發し、稍花開かんと欲する位に至りての事なれば、種子播布の已後にて候。

二三問。臨終の一念、見佛往生得る者なれば、何故平常の念佛は容易に見佛し能はざる事に候哉云々。答。是御質問に就いては、粗第三の御問の、臨終の無後心無間心と、平生の有後心との用心の云何が、發得の上に影響を及ぼして、見佛の成と不成とに爲る事なるべしと思はれ候。若し見佛と云はゞ、必ず相好色身を見るものに局はらず、廣き見佛の、或は明相、亦瑠璃寶地、亦花等の色相、或は慈悲に對する感激の如

きも、發得はつとくの分ぶんと見る時ときは、必ずしも見佛けんぶつ難がたきにあらずと存ぞんじ候まう。若局もして狹義けいぎの見佛けんぶつは、誰だれにても容易よういに成なすと云ふことは或あるひはいかゞと存ぞんじ候まう。眞實しんじつ無後心むごしん、即すなはち死心ししんに念佛ねんぶつせば必ずしも難がたきにあらずと存ぞんじ候まう。

四問もん。若もしし罪障ざいしょうの爲ためめ見佛けんぶつ出來きざる者ものならば、宗祖しゅうその一念ねんに一度どの往生わうじやうと云ふこと答こたへ。見佛けんぶつ即すなはち往生わうじやうと云ふは、理りに於おいて然しかるが如ごとし、然しかれども亦經またきやうに彼下品かのげはんの彼國かのくにに生うまれて已い後ご、六大劫だいくふまた又また十二大劫だいじふいまた未まだ佛ほとけを見みざる如ごとく、又大經またたいきやうに已すに淨土じやうどに生うまれて胎生たいじやう者もの五百歲さいちゆうふ中ちゆう不見佛けんぶつ不聞法もんほふとう等の文もんを以もつて見みれば、往生わうじやう即すなはち見佛けんぶつとも云難いきあり。故ゆゑに此この文ぶん意いを、現世げんせ一度どの往生わうじやうの意いに例れいする時ときは、往生わうじやう必ずしも見佛けんぶつなりとも云いひ難がたく候まう。併しかしなが廣意くわういの見佛けんぶつならば、見佛けんぶつ即すなはち往生わうじやうと云ふこと理在りざい絶言ぜつごんにて候まう。

見佛けんぶつに就つての愚見ぐけん

禪ぜんは見性けんしやう成佛けんしやうを旨趣ししゆとす。淨土じやうどは見佛けんぶつ往生わうじやうを以もつて宗教しうけうとす。若もしし見性けんしやうを離はなれて禪ぜんを修しゆする者ものは、無價値むかち無意義むいぎなると同じく、見佛けんぶつ往生わうじやうを外ほかにして念佛ねんぶつする者ものは、已すて

宗趣を失したる行にて候。見佛往生を從來臨終に期したるのが、超然主義第二期の佛敎にて候。然るに現代の有爲なる士女の求道、未來を期するもの稀に、現在を通じて永遠に到るの道を求む。故に應病與藥、淨土敎に於て、五重の中、機法行信と傳ふる如くんば、現代機を救ふには彌陀の眞實義を顯はし、從來の方便門を超えて、正しく佛敎の眞面目を以て、救度せざるべからざるものとす。元來、彌陀最尊第一者なる絶對靈體には、未來現在の隔なし。絶對の彌陀界中に於て衆生自ら現在と未來とを隔て見るのみ。彌陀界何を隔あらん。視玉へ、太陽已に晝夜なし。地球自ら環て晝夜を爲す太陽に年月なし、地球自ら年月を爲すのみ。況や絶對の彌陀大光明中、過現末の三世あらんや。彌陀の大光明衆生の信念ある處に現す。但須らく念佛して大光明に接觸すべし。

見佛主義と云よりは光明主義

見佛には二の義ありて、念佛者の宗教と爲す所なり。一には見佛は念佛者の全生命



の復活したる徴候として顯はる。念佛して全く眞の佛子たらんには、全生命の復活ならぬ。彌陀の佛子と生れたる兆には、信仰（心靈）の眼が開けるなり。例へば人の赤子が産れ出て暫らく眼も見えざれども、小兒が體が育つに隨つて其兆候として先づ眼が視ゆるに至る。抑眼の視力が發達して視ゆるに至るは、全體の發育したる兆である。念佛者心眼開きて佛を見るとは是れ靈的全生命の發達したる兆候である。全生命の復活にあらざれば、眞の佛子たるにあらず。故に見佛とは心靈的全生命の活きたるの謂である。只眼のみ發達したる事にあらず。云ひ換れば、活きた信仰の状態に外ならず。二には、實には佛は見える見えざるに局はらず、如來常に行者の眞正面に在ますとの信念が最も大事にて候。我ら衆生は、如來の我と共に常に在ますと云ふ信念の確乎たる處、我如來と共に在との信仰が是生命にて候。されば釋尊入滅の時に徒に示すに、如來の法身汝らと共に在りとの遺言、我ら如來を離るゝ時は闇黒の生活の止なきに至る。聖善導の佛身圓滿無背相、十方來人皆對面の讚文實に有難く感じ申

候。見不見に局はらず、我如來と共に在りとの確乎の信念こそ宗教の第一義にて候。

### 光明主義

見佛有難く候得共、世に往々若し見佛せざれば往生できぬとか、又現在より如來と共に在る如來光明主義とは、見佛已後にあらず哉との疑の爲に、光明主義は普遍的に一切衆生を攝取する能はずとの疑惑を招き候に依り、見不見に局はらず、光明生活を以て如來に依つて活きたる信仰と云ふ主義なれば、即ち一切を普遍的に念佛三昧を以て光明に攝取し、光明生活を以て一切と共に、現在を通じて永遠の光明を期する安心を立つることを主義とせば、普遍的に行るゝものと信じ候。依て見佛を面に表さず、光明主義を標榜して、すべてを攝取し、大ミオヤの慈光に攝する事を願はしく存じ候。尚種々申述度存候得共後便に譲り候。

毎日非常に多忙につき校正するの暇なし、文字復雜して意を通じ難きあらんも、再び訂正するの暇なし、願くば恕し至へ。

二百四十五

良に惟みるに、人身受け難く、佛法遇難し、若此身今生に度せずんば、何れの生を期してか出離の縁あらん。

説處によれば四月十日より勤務演習に召集に被成候由、既に一度彌陀大悲の懷に抱かれぬる身は、假令何の地、何なる事も悉く如來の使命にして勇みて勤務爲らるべきやうにこそ願はしく候。

念佛心を以て爲す業は悉く何なる事も佛心佛業にて候。いつも如來大光明中なる我身なる事を信じて、心に彌陀を忘れぬやふにいたされ度候。

彌陀は本覺の大ミオヤ、子をおもふ慈悲の遺瀬なきより、久遠劫來番々出世の佛となりて、此衆生界に出て、大ミオヤの慈悲を示し玉ひ、殊に法藏菩薩として出て玉ふ時は、假令身を無間獄火に焼かるゝとも、衆生に代る罪を贖はんが爲ならば、忍ん

で終に悔いじとの聖意を啓示し玉ふ。實は宇宙全體彌陀の示現、天地萬物と爲りて我等衆生に供して我らを活かし玉ふ所以は、我等に大慈悲を現はして、大ミオヤをしたはしめん爲の御方便、衆生一心に念佛して深くミオヤのミムネを得る時は、大慈悲の尊顔を瞻み奉りて、父子相迎の日も必しも死後にあらざることを覺らん。

## 二百四十六

志し深き求道者よ

知識は學んで得べく、富はつとめて得らるべきも、實に發し難きものは道心なり。宿因濃厚にあらざるよりは起り難きものにて候。

子よ。幸に發し難き道心を發せり、起て道を求めよ、つとめて道を修せよ。

男子志を起して出家學道を希望すも、俗縁甚だ裁ち難し。

教祖釋迦世尊迅に道心を發し、父王に出家の願望を願ひしかども、父王泣いて許し

玉はず、太子妃耶輸陀羅恩愛の情割り難し。然れども太子の金剛の意志は、いかなる事情も之を摧くこと能はず、決然起ちて宮を出で學道六年終に臘月八日明星出でし曉無明生死の夢醒めて無上正覺の道を得玉へり。釋尊自ら正眞の光を得玉へば、起ちて一切衆生の爲に、大燈明と爲りて世の暗黒を照し、衆生の爲に永遠の生命と靈の光明に活きるべき道を宣傳し玉へり。されば子よ、人生再び受け難し、佛法遇ひがたし、殊に如來光明の妙法に遇ふこと、盲龜浮木よりも難し。幸にして道を求めよ。

## 二百四十七

大なるミオヤは我十方法界を遍く照し、わけて我名を呼びて頼む者に答ふる心光を以て衆生の心靈に靈妙の響を與へ玉ふ。さればあなたが一心に餘念なく稱名する時あなたの一心彌陀に對して眞正面に心を向けて念する時は、あなたの眞正面に在ます

ミオヤはまた眞正面にあなたに答ふるに靈なる響を以てす。あなたに御答が如何に聞え上げられますか。それともまた御答の聲が確と聞え上げられませぬか。御答の響が感せられませぬか。もしあなたが聞えぬと云はゞ、そは何故に聞えぬのでせう。ミオヤはあなたを眞實に愛して在ますことなれば、能くも遣る瀬なき親心を汝は思ひつきしぞ、眞實に汝が眞ごゝろから吾ミオヤよと云ふて呉れよかしと忘るゝ間はなきに、能くも我名を呼んで頼む心を發せしことよと思召す如來に在ませば、何ぞあなたの稱名は御答なき筈はない。斯やうな譯なれば必ず御答は有る筈なれども、あなたがよこ心の爲めに御答を自分と聞きはづして居るのかと思ふ。實に甚深微妙なる御答の響は靈略な思を以ては聞え上げられぬ。

私には御名を呼び上る毎に微妙の靈感を以て答へ玉ふことなれば、ましてあなたに對して御答ない筈はない。然れば如何に心を致して御名を呼び上ぐれば、ミオヤの御答の響が聞え上げられるであらうとなれば、私は斯やうに心を至して念じ上げ、ま

た御答の響が聞き上げられます。眞實に如來様は私の眞正面に在すことを信じ、深く念ひ上げて、ナムアミダ佛と餘念なく、己が心の統一するまで念佛して居りますと、漸々に心も静りて餘念なく、只だ如來さまの御慈悲の面かげが自づと彷彿として思はれて來る時に、何とも云はれぬ辱けない有り難さの靈感が感じられて來ます。これぞ如來の靈妙の御答は耳には聞えぬが、直覺的に心に聞えられるのであります。あなたも斯やうに念を用いて一心に心を至して念佛して眞正面の如來に向つて念じ上げ何時までも心の統一するまで念佛し、如來の靈響を聞き玉へ。始めの程は仲々二時間も三時間もかゝつてもそれはあなたの一大事のことですから辛抱なされ。段々に時間が短くも統一が出來て益純熟するに随つて遂には念佛しさへすれば、忽ちに三昧に入つて如來の靈響に充たされる妙境に入ることが出來て來ます。之即ち感應同交が宗教の唯一の機關であります。若し感應の聞えぬは、古人が、

祈りてもしるしなきこそしるしなれ、己が心に誠なれば

## 二百四十八

謹ついでんで申まを上し候まを愚まを納まを平常まを西まをに東ひがしに大法たいはふに奉ほう仕しし、佛ぶつ陀だの加か被ひ力りきによりて多おほくは事ことも  
 なくて仕つかへ來きたりしに、今いま京きやう都とより相さう州しゆう信しん州しゆうを經へて越あち後ごの國くにに巡じゆん回くわい傳でん道だうし、豫よ定ていの前ぜん六  
 個こ所じよ無む事じに勤つとめ終はりの柏かし崎しき極ごく樂らく寺じ五か日かん間べつ別じ時じ三まい昧まい會かいの第だい三さん日にち目めより大おほいに發はつ熱ねつ致いたし候まを  
 之これ宿しゆく業ごうの所じよ感かん止やむを得えざるものか。實じつは初はつめには、かりそめの事ことと思おもひ來きたりしに、熱ねつ  
 度ど益ます々く多おほきを加くはへ三さん十じゆ八ぱつ度どより九く度どの間あひだを始し終じゆう往わう復ふくして止とまらず、從したがつて食しよく慾よくも減げんじ只  
 少せう量りやうの牛ぎゆう乳にうと冷れい水すいを仰あほぐのみ。幸さいひに熱ねつ誠せいなる信しん仰かうを以もつて加か護ごなさる籠かご島じま醫い師しなり又  
 長なが岡おかの若わか菜な氏し兩りやう氏しともに、至し誠せい心しんを以もつて之これが療れう養やう法はふを講かうじ居をるも、少すこしは前ぜん途とに明あかり  
 を見みつゝある如ごときも、未いまだ之これとて確たしかな證しよ明めいを得える事こと能あたはず、誠まことに業ごふ障じやう深じん重じゆうの然しから  
 しむる處ところ、唯たゞ懺ざん悔げ、如ごとく來きたの大慈だい悲ひを仰あほぐのみ。



豫て當月廿八日より五重相傳會相勤め候事に折角の請に應じたりしも、何とも懺悔の至りなれども、とても此の分にては爾後の經過とてもそれ迄には見込みなからん誠まことに折角せつかくの御思召おほしめしに對して申し譯わけなきことに候へども、若し折角の御催に何方なりとも傳燈師の見込有之候はゞ、それへ御たのみ下され度、若しそれとも辨榮が餘命あつて、再び皆さんの御好意に酬むくいる事を得るの期を御待ち下され候はゞ、本年中には難むづかしく候はん。明一月にてもそれ迄に回復相成候はゞ然るべく、いづれも一つに如來らいの加被かひ力を仰あやぎ一つには皆さんの御好意に酬むくいまつらん事を仰ぐのみ。

病症びやうしやうは始めには或はチブスの熱ねつにあらざりしやとの疑點ぎてんもありしが、その點は全くチブスにあらざる事に略決定りやくけつていいたし候。何にしても非常の熱の爲めに病人も弱りて居り然しその大熱の中にもたゞひとり光明くわうみやう赫耀くわくやくとして何時でも御助け下さるは獨りの如來にょらいましますのみ。(大正九年十一月二十三日)

謹んで申上候先般祖山勢至堂に於て御地の教區講習會講師の請に應じ候も、誠に不徳の身をも顧みず、皆さん諸の大徳衆とともに、佛祖の恩寵を報せんが爲め勤むべき事業の酬いられん事を喜びながら自ら喜んで應じたりしも、爾後京都より相州信州を経て越後の國に至り、豫定の個所六個所のうち四個所は無事に巡回し終に柏崎町極樂寺念佛三味會の五日間のうち第三日目より大分に發熱し自ら本堂に出る事能はざりし。然れども集り來りし同行衆の熱烈なる念佛は堂に響きわたつて佛力の不可思議なるを顯現するの思ありき。唯喜び、辨榮病めども彌陀の光明全く時代を救ふの靈力不可思議なる。

さて愚納發病爾後の經過は三十八度より九度の間を往復してやまず、實は近頃覺えなき熱度にて候。如斯の人生に自己の身の上に病魔の伏在しありし事を自覺する事

を得たるも、これまた一種の光明ならん。この分にてはとも來月の六日迄には回復の見込なく、發病後幸に當地に信者にて籠島と云ふ先生あり長岡に若菜氏あり、兩醫もとより熱誠なる信仰家、今回特にあつく治療の法を講じて呉れられしも未だとても來月六日頃迄には回復の見込みあらじ。何とも申譯無之候へども、今回は折角の御好意にそむき申候事全く病魔のおかす所、願はくは了察し給はん事を乞ふ。若し何人か皆さんの御希望にあふ人御見當り有之候はゞ御聘請有之度、若し横濱の笹本文學士にては如何に候や。これまた先方の都合は解りかね候へども或は代りに應じなさるかとも存じ候。山口縣の藤本淨本上人が只今祖山の加行に來てゐられ候へども、之は加行の終りが餘程おそく十二月の末に相成可と存じ候へば、とても間にあひかね候と存じ候。まことに懺悔の至りに候へど御斷りかた／＼申上候。(大正九年十一月二十三日)

## 二百五十

彌陀の眞理と靈知と靈能との光は、一切の處に徧ねくあつて、人の精神を照し給ひ此の靈光にふるゝ者は、眞と善と美との心靈態に感化せらる。如何なる人も之れに觸るれば、靈化せられざるなし。經に彼佛の光明無量にして十方の國を照すに障礙するところなし、故に阿彌陀と號すと。

己が罪惡を知れ。

人は天然精神は無明と苦惱と罪惡との皮殻が必ず被つて有り。人は自ら智ありと謂ふも其の實は痴なり、自ら生の從來する所、死の趣く理を明むること能はず。心は無明である。また心の愛惱と身體の苦毒とは、何人も免るゝこと能はず。即ち老病死の苦、愛別離苦、怨憎會の惱は人に纏ふて捨てられぬ。次に罪惡は人の胸は腹のあつまる處、經に煩惱の毒蛇眠つて汝が心にあり、黒虻の室にあつて眠るが如しと。實に

人の胸には罪惡の毒蛇は常に睡つて潜伏し、縁に歴れ境に對して常に顯動す。己が情に順へば貪戻して飽くことなく、意に逆へば憤怒を起し、忿懣、恨戾、覆藏、害意、憍慢、妬忌、無慚、無畏、懶惰、放逸、等の總ての罪惡が胸に潜伏して、時々頭をもたげ顯動す。斯かる罪惡の主たる主我を執して自ら是とす。是れ罪惡に非ずや。

光に依りて自己を照す。

解脱。自己は罪惡にして、自ら之を解脱して、罪と惱との雲を除きて、清淨の心靈の月を顯はす事は、自力の及ばざる處、之を脱却するは佛教による外に道あることなし。

佛教多門なり。八萬に餘る。就中、唯一無上の最高等に最完全に容易なる一法を撰擇するときは彌陀の一法のみ。是れ最勝、至易、一に彌陀の智願即ち眞理と靈知靈能との光を信念して三昧正受到に稱ふ時は、無明罪惡の雲いつしか晴れ、聖靈の月は心に現じて、皎々たり。靈化せらる。

皎月かうげつ。

日は已すでに西にしに入りて見みへねども、皎々かうくたる月つきかげに反映はんえいせる光ひかりによりて日の光ひかりを知しる如ごとく彌陀みだの光ひかりは遍あまねく照てらして障さはりなきも、衆生しゆじやうの信念しんねんに應現おうげんす。宗祖しゆうそ聖法せいほふ然上人ぜんしやうじんの精神せいしんに感染かんぜん靈化れいけわしたる聖人せいじんの内容ないようをうかがへば彌陀みだの光ひかりは皎々かうくたるに非あらずや。

聖しやうは初はじめ聖道しやうだうの中なかに出離しゆつりの道みちに心こころを煩わづらはし、二十餘年じふねんの焦慮くしん苦思くし、遂つひに導師だうだいの一心しんせん專念せんねんの文もんによりて、彌陀みだの聖意せいいを悟さとりて爾しかより一ひとに彌陀みだ三昧まいに歸きし、口くちに稱とんふる所ところは聖名みな、心こころに念ねんずる處ところは聖意せい實現じつげんせんことのみ。年久としひさしく功積こうつみて、彌陀みだの聖意せいに感染かんぜん靈化れいけわせられたり。

然しかれば宗祖しゆうその御影みえいに對たいしても、其その内面ないめんの如何いかに麗うるはしく且かつ濃こまなる無限むげんの生命せいめいの愛あいに充みされたる、内うちに盜あふれて表おもてに現あらはれたる御おんよそほひを瞻仰せんがうし上たてまつる時は、滿腔まんかうの愛あいにうたるゝ感かんじに堪たえぬのである。

感染靈化かんぜんれいけわ

吾祖は曾て學び來りし一切の雜行雜修を廢捨して、一に専ら彌陀三昧に心を止め、神を凝らし、白いと藍に染みたる多年の功つもり、處として充滿たざるなき無碍の光明眞善美の靈光に感染し同化して、いまはいと慈愛に染みにける、しぐれにあふ毎に色濃かなる秋のもみぢの其のうるはしさ何にか譬ふるを得ん。深く内面に感染し靈化したる内面が終に其の消息にこそ洩されたり。

阿彌陀佛にそむる心のいろに出でば

秋のこずゑのたぐひならまし

阿彌陀佛は是れ無限の光明である。生命である。靈知靈能であります。彌陀は眞理なり、神聖、正義、恩寵、全智、全能にてまします。一切の處に偏在し給ふ靈にてまします。斯の光に觸るゝもの一として、すべての心裡の惡質は脱却して聖靈に同化せられざるものなし。

感染靈化の人の方面

無碍の靈光は一切處に偏在しぬるも、神靈態にして、肉眼に視、耳に聞くべきものに非ず、之を觀見し感得するものは精神の内面にあり。人の精神作用を三類に分つときは、智力と感情と意志とす。譬へば太陽の光が目には明とし、觸るれば熱と感ずる如く、精神態の彌陀の光明にも感情に感ずると、意志に照さるゝとは、功能の異なきに非ず。此れよりは略して、感覺と感情と智力と意志との心の三機能に彌陀の薰染靈化したる態をのべん。此の三機能に對する彌陀の方を清淨、歡喜、智慧、不斷との四種の光明とす。

彌陀の靈光が人の心機に感染靈化するに、惡質を脱却すると、靈に化すとの、消極と積極との兩方面あり。

清淨光とは、人の感覺に對する光なり。感覺には、人の天然の感覺は染汚不淨にして、眼耳の慾、五塵六慾に染汚せられて清淨なるものに非ず。然るに清淨光によりて、龜質なり垢質を脱却して、感性感淨皎潔となり、淨瑠璃に眞金を盛るが如く



内外皎々として、八面玲瓏たり。聖歌に

にこりにいで、いさぎよく、さける蓮のいろこそは、

きよき光にひらかれし、人のこゝろの花ならめ。

あかねさすてふ朝日かげ、見るもまぼしくかゞやくは、

きよき光にてらされし、人の心にたぐひてん。

雲をあらしにはらはせて、さやかにてらす秋の月、

きよき光りにあらはれし、心のすがたにたぐひてん。

みがきててらす摩尼の珠、もりてかゞやくこがねとは、

清き光にてらされし、人のこゝろのいろならめ。

此の四種の聖歌は、聖の清淨光に感染したる感覺性に發現したる状態をよみしな

り。

歡喜光とは人の感情に感染する處の光なり。天然の感情は、苦惱と罪惡の感情に

して、歡喜光によりて、情の苦毒と罪惡の感情的垢質を脱却するが故に、歡喜光により靈福に充たされ、平和歡喜にして心情安穩にして情操高尚なり。

聖歌に、

くるしき海は限りなく、まよひは深く底なきも

めぐみの船に乗りえたる、ひとの心は安らけし。

うきよの海は廣くして、なやみの風ははげしくも

めぐみのみなとに舟とめて、やすろふ心はやすらけし。

朝日に匂ふ八重櫻、花のすがたはよろこびの

ひかりにひらきてうるはしき、人の心にとぐひてん。

天にも地にもよろこびの、光はあまねくみちみてり、

心の花のひらきなば、とはにのどけき春ならめ。

斯の四種は、人の感情が彌陀の歡喜光によりて、心情の花開きて、平和にして、奥

ゆかしく、優やさくして、また新鮮さばかなる活氣くわつき、また神しん的てき平和へいわと靈福れいふくにみたされたるさまを  
よみしなり。

智慧ちまくわう光ひと。人の智力ちりぞくに感かんずる光ひかりなり。智力ちりぞくといふも通常つうじやうの智識ちしきにあらず。三昧まいの神秘しんぴ  
の中なかに佛智ぶつち見開けんひらきて、彌陀みだの聖貌みすがたおよび聖旨みこころ等らが啓示けいじせらるゝ義ぎにして、三昧海中まいかいちゆうに  
觀念くわんねん的てきに啓示けいじせらるゝすがたなり。

智慧ちまくわう光ひとを仰あふぎつゝ、心こころのしみづすみぬれば、

こがねのすがた妙たへなりし、月つきのおもかげ宿やどるなり。

珠たまやこがねにかゞやける、きよきみくにはさながらに、

聖きよき光ひかりにみが、れし、心こころの鏡かざりにうつるらめ。

智慧ちまくわう光ひとの日ひや照てらす、さまやの窓まどのひらくれば、

無明むみやうにかくれし秘事ひごとを、啓示しめさるゝなり悟さとるなり。

妙たへなる法のりの身みの月つきは、照てらさぬ處ところなかりけり、

迷まよひの雲くものはれぬれば、わがのきばにぞながめえん。

不斷光ふたんとくわう。斯この光ひかりは人ひとの意志いしに被かる。人ひとの天然てんねんの意志いしは野卑やひにして、志望しぼうまた淺劣せんれつなり。意志いしの惡質あくしつ不道德ふだうとくの情操じやうさう惡質あくしつ脱却だつてきやくして、神聖しんせい、正義せいぎ、至高善しかうぜんに靈化れいくわせらる。即すなはち意志いし金剛こんがうの聖善しやうぜん提心だいしんになる。

つみに亡ほろびし我々われらを、救すくふ方便てだてを立てんとて、

五劫ごこつに思おもひをつくしたる、ふかきめぐみを忘わするなよ。

我等われらが爲ためにいくたびか、數かずをも知れぬ身みをすてし、

ふかきめぐみを思おもへば、身みをくだきてもむくはなん

天てんにも地ちにもみちみてる、めぐみの光ひかりは被かるなり、

ふかきめぐみを思おもへば、感謝かんしゃの心こころを忘わするなよ。

神聖正義しんせいせいぎのみひかりに、照てらされつゝある身みとしらば、

聖きよきみむねをかしこみて、おほせのつとめをばげむべし。

斯の四首のうち初め二首は、彌陀が衆生を救靈の爲に菩薩の行願をなし給ひし彌陀の無限の愛を現はす爲に、法藏菩薩と示現して、無量の苦難を受けて我等が罪より解脱せしむる道を顯はし給ひ、また無相に相を示現して、盡十方無碍光如來として神聖、正義、恩寵、全知、全能を以て、一切を救ひ、攝取靈化し給ふ。

人の信仰の心機に、感染靈化したる心象は斯の如くなるも、然らば如何にして、心機開展すべきやとならば、彌陀の眞理を諦かに聞きえて、彌陀の神的觀念に凝し、自己を投じて行住座臥、念念不捨に、聖意の實現を祈念する時は、若しは頓速に若しは漸次に、純熟して、心機開發して、聖意實現するに至るべし。

信仰の功果は、各自の心機に顯現すべし。各々須らく此靈光によりて、四心機の成否を點檢すべし。

しゆしよあげにじゆすつまぐりてたかねぶつ

こゝろのおにをさていかにせむ

きのふまでおにのすみにしむねどのも

けふみだそんのみだうとはなる

# 内容摘要

一〇

- (一) 要中の要は念佛三昧……………一
- (二) 枝に離れぬ柿の如く……………二
- (三) みすがたはおじひのあらはれ……………四
- (四) 稱ふる眞正面に彌陀現に在す……………五
- (五) 心中に活ける本尊をおすへ申す……………八
- (六) 稻草は日々死の方に枯れ稻實は日々生の方に實る……………一〇
- (七) 大みはからひは子に知れず……………二
- (八) 信あれど愛なくば鳴らぬ鐘の如し……………三
- (九) 息心一致の聲……………六
- (十) 生死に即して大涅槃……………七

- (十一) 宇宙全體が彌陀たるの實感……………二八
- (十二) 實驗むつかしき事に非ず……………一九
- (十三) 聲に心が入つて聲と心と共に佛……………二〇
- (十四) 靈的電話の交換手……………二一
- (十五) 光明土は近づけり……………二一
- (十六) 傳 道……………二三
- (十七) 他事は兎もあれ角もあれ……………二四
- (十八) 天分に應じて使命を果す……………二五
- (十九) 華 燭……………二五
- (二十) 熱さも有難し涼風も有難し……………二六
- (二十一) 路……………二七
- (二十二) 舊佛敎……………二七



(二十三)	月 刊……………	六
(二十四)	法主様に非ず光明主義の一兵士なり……………	六
(二十五)	歳を重ねて垢を増す……………	九
(二十六)	御慈悲の面影は常に彷彿として……………	〇
(二十七)	靈性開發こそ人生の一大事……………	〇
(二十八)	捨てずも奴隸となる勿れ……………	三
(二十九)	一切萬物は光明の顯現……………	三
(三十)	迭相吞噬……………	六
(三十一)	郡内一の財を有して郡内一の苦悶の日暮……………	四
(三十二)	何についても如來の御蔭と云ふことを専ら念じてミオヤくと云ふうちに愛情が暖になつてくる……………	四
(三十三)	一日一度でも家族的に讃禮しあとは常念につとむ……………	四
(三十四)	貴方の心が無くなりて残る所は如來様ばかりになる……………	七

- (三十五) 心の奥の奥底に常に親様を秘め置きて…………… 四八
- (三十六) 病床の處また三昧道場…………… 四六
- (三十七) 身には惱があらうとも心は大悲の懷に…………… 三五
- (三十八) 日よりも明に如來は空中に在して…………… 三五
- (三十九) すべてを親様に御まかせ申して…………… 五五
- (四十) ミオヤが何となく戀しく慕はしく…………… 五六
- (四十一) 靈的活路…………… 五七
- (四十二) 現に尊く嚴臨し給ふ神聖なる尊容…………… 五八
- (四十三) 如來様の御試験は日常の爲す業の中に在り…………… 五八
- (四十四) 眞の幸福は光明の照し返る家庭…………… 六一
- (四十五) 身を養ひ下さるゝは靈を實らしむる聖意…………… 六二
- (四十六) 大ミオヤの命と潔く果さん心より爲す業は此世の作業が…………… 六四  
其儘佛道修業……………

- (四十七) 此御縁を空く過しなば御慈悲に取りつく御縁なし…………… 六六
- (四十八) 無量永劫助かる心の發りしも此故と思へば病氣も恩龍…………… 七〇
- (四十九) 御名を稱ふれば自づと人格的の尊體を念す…………… 七四
- (五十) 我等が子を念ふ如くに如來は我等子を憐み給ふ親心…………… 七五
- (五十一) 時計の針の斷へ間なく…………… 七九
- (五十二) 宇宙に本然の大道あり…………… 八〇
- (五十三) 如來は宇宙のいのち世のひかり…………… 八二
- (五十四) 亡き子の爲めには母のまことの祈が第一…………… 八八
- (五十五) 樂しき園にて無上のさとり…………… 九一
- (五十六) 死別の悲より心靈を救ふが一大事…………… 九二
- (五十七) 夜もすがら鳴き通す蟲さへあるに稱名の…………… 九三
- (五十八) 頼みても又頼むべき常住不變の天心光中に立脚地を構へて  
 日々の所作を爲す…………… 九六

- (五十九) 花の色もミオヤの訓誠……………100
- (六十) 娑婆八苦の風もミオヤの慈悲の懐には通せず……………101
- (六十一) 道 詠……………105
- (六十二) 照るみすがた……………109
- (六十三) 三身即一のミオヤ即ち南無阿彌陀佛……………111
- (六十四) 我身の無事を祈ること勿れ如何なる事にも不動の心力を與へ給へと祈れ……………115
- (六十五) 光明は之に致一する身心の病を癒す……………118
- (六十六) 衣食憂ふるに足らず如來より賜ふ……………117
- (六十七) 如來様任せにやすく暮す時病も自ら癒へむ……………118
- (六十八) この光ある所極樂世界なり……………118
- (六十九) 煩惱の炎も涼くならむ……………118
- (七十) 一日も一時間も無限の光と壽に充されんやう……………118

- (七十一) 大光明に接觸するが一大事……………一三四
- (七十二) すべての人と共にみすくひを得ん事を……………一三五
- (七十三) 信仰の徳として禍も幸に思ひかゆる……………一三五
- (七十四) 守る條目……………一四一
- (七十五) ねてもさめても知來を憶念し奉る……………一四三
- (七十六) 我心如來様の中に在りや否や……………一四七
- (七十七) 淨土の莊嚴は社會に實現せむ……………一四九
- (七十八) 角が圓くなるまで修行……………一五九
- (七十九) 光明によらざれば其難點は除き難し……………一六〇
- (八十) 現職は大ミオヤより豫て見立て下されしもの……………一六一
- (八十一) 聖名を稱へて聖意の現れを仰ぐ……………一六七
- (八十二) 欠點を誇る人こそ眞の師なり……………一六七

- (八十三) 大ミオヤより來る一大活動寫眞……………一七〇
- (八十四) 其欠點が信仰によりて美點となる……………一七二
- (八十五) 風邪の神を宿すと熱が出るやら咳が出るやら如來様を御宿し  
申すと有り難いやら楽しいやら……………一七四
- (八十六) 斯光宇宙秘密の奥室を啓示す……………一七五
- (八十七) 火微なるに扇ぐ風強ければ火還つて消ゆ……………一七五
- (八十八) いかなる境合にも麗はしき色を……………一七六
- (八十九) 天は笠地は足駄なり……………一七七
- (九十) 十方法界彌陀の懷……………一七九
- (九十一) 精神改造……………一八〇
- (九十二) 等閑に附するもの世に捨てらる……………一八一
- (九十三) 汗と膏より絞り出す歡喜……………一八三
- (九十四) 世の爲に身の苦むが却つて樂……………一八三

- (九十五) 犠牲なしに世を救ふこと成り難し……………一八四
- (九十六) 信念して忘れぬ御頭に彌陀尊は常に在す……………一八四
- (九十七) 大悲の眸を注ぎ給ふ……………一八七
- (九十八) 光明宣傳……………一八八
- (九十九) 米の増收幾百萬石の利となる熱さは難有き賜……………一九〇
- (百) 學園……………一九〇
- (百一) 己が心に欺れて自らさ迷ふ……………一九二
- (百二) ミオヤをミオヤと呼ぶ御互は同胞……………一九三
- (百三) 信心眞實なれば靈驗皆眞實……………一九五
- (百四) 太陽を通じて親様を念す……………一九九
- (百五) 如來は一方より拜めば宇宙に充ち返る智慧と慈愛の光明ばかりなれど又一面より觀すれば萬徳圓滿の麗しきみすがた……………二〇二
- (百六) みむねをうる人は活ける觀世音……………二〇二

- (百七) 心霊實らずば百歳の壽も何の詮…………… 101
- (百八) 休みなしにあせる胸の中…………… 104
- (百九) 地球の一巡りに振り落さるゝもの幾十萬…………… 108
- (百十) 回 向…………… 110
- (百十一) 追 孝 照 鑑…………… 111
- (百十二) ミオヤの源に遡れば切つても切れぬ同胞なり…………… 114
- (百十三) シベリヤも此處も威神の光明中…………… 116
- (百十四) 心霊の金剛石は普通倫理の灰を以ては磨く可からず唯念佛三昧  
の金剛沙のみ能く磨くを得ん…………… 118
- (百十五) 念と云ふ字は二人が一となつたる心…………… 121
- (百十六) 靈的氣候に觸れし内容のうま味…………… 124
- (百十七) 口に稱名意に憶念身に光明的行爲…………… 127
- (百十八) 一塵の我身も心てふ不思議の我を以て全宇宙に等しき我…………… 129



- (百十九) 臭氣を放つて蠅を聚むる必要なし……………二三一
- (百二十) 御慈悲の火の種を名號の中からうけて口稱の風で扇ぐ時光明  
が心に漸次に燃え付く……………二二三
- (百二十一) 切つても切れぬ親子の三縁……………二二五
- (百二十二) 人々の心の病を癒したいのが愚禰の病……………二二七
- (百二十三) 精神の奥底に永遠に活る靈性あり……………二二九
- (百二十四) 一切有爲法の奥底に絶對無限の大光明者大壽者在す……………二四二
- (百二十五) 人間の里親に預けられし如來の御子……………二四三
- (百二十六) 慈悲の光……………二四六
- (百二十七) 心をみむねにとけこみて……………二四六
- (百二十八) すべてを捧げて御頼申せば大ミオヤは必ず宜きに計らひ下さる 一四九
- (百二十九) 口に念佛の空氣が通はぬと念の火力が弱ります……………二五一
- (百三十) 業 障……………二五三

- (百三十一) 如來様を親玉とした一連の珠數……………二五五
- (百三十二) 一切の魔事は光明の缺けたる所に發す……………三五七
- (百三十三) 本家に還る……………二六〇
- (百三十四) 經……………二六五
- (百三十五) 身をミオヤにさゝげてしまへ……………二六五
- (百三十六) 隱德をつみてこそ身にとくはついてくる……………二六六
- (百三十七) みめぐみ……………二六八
- (百三十八) 其不自由が此土に極樂を實現す……………二六九
- (百三十九) 困難する程其功多し……………二七〇
- (百四十) より熱き信念だにあらば寒さは物の數かは……………二七一
- (百四十一) 安樂を貪りて一生空く過す人は人生を無視するもの……………二七二
- (百四十二) 身心清淨なるをうる時洗ひ去る如くに其病は治す……………二七三

- (百四十三) 荒祇にかくれば早く鑄がとれる……………二七四
- (百四十四) 紫衣金襴をきらめかして死體の垢書め……………二七五
- (百四十五) 佛教を家庭に活用せしむ……………二七六
- (百四十六) 大切に……………二七七
- (百四十七) 闇……………二七八
- (百四十八) 日々の作業悉く佛行……………二七八
- (百四十九) 宗教革命は必ず來る……………二七九
- (百五十) 法を施さずして衣食する僧は負債を擔ふて餓鬼道に落つ……………二八一
- (百五十一) 自ら火を點せずして他の蠟燭に傳ふべからず……………二八七
- (百五十二) 種を蒔け……………二八九
- (百五十三) 禮拜式の意が光明元祖の主義……………二九〇
- (百五十四) 人の業識を本とせば十方億土の西方に到るも亦人界なり……………二九五

- (百五十五) 物を苦にし腹を立て……………二九五
- (百五十六) 五欲の境には通宵ねむらず修行にのぞむ時は半時にもあ  
くびす……………二九六
- (百五十七) 大ミオヤの思召を縁ある人に知らせるのが報佛恩のつとめ……………三〇〇
- (百五十八) 光明を稱へて……………三〇一
- (百五十九) 目前の塵埃……………三〇一
- (百六十) 取りまとまりし事もなき一生……………三〇二
- (百六十一) 三昧發得を期せられたし……………三〇四
- (百六十二) 浮き世の浪風は是非もなし……………三〇六
- (百六十三) 十二の光明晝十二時夜十二時休なく照し給ふ……………三〇七
- (百六十四) 思ひかへれば苦も却つて樂となる……………三〇八
- (百六十五) 日々を空しく暮さぬやう……………三二〇
- (百六十六) 北海の濱に釣をたれて武王てう魚をまつダイさんの如く……………三二〇

- (百六十七) 已に佛に献せし身……………三三二
- (百六十八) 三味に入れ……………三三三
- (百六十九) 御慈悲の厚きには寒きをも覺えず……………三三三
- (百七十) 光明を以て國民を救へ……………三四
- (百七十一) 體がぬければ直ちに蓮華藏世界……………三五
- (百七十二) 悦びも悲しみも夢のほど……………三六
- (百七十三) 下らない事を考へる程下らない事はない……………三七
- (百七十四) 感謝の日暮し……………三七
- (百七十五) 法の子をもつ女となりし事なれば……………三八
- (百七十六) 早く朝のしのゝめとなりて光明の日暮しに……………三八
- (百七十七) 道 詠……………三九
- (百七十八) 内にみてるミオヤの慈悲を一々の言語動作に現はして……………三三二

- (百七十九) この一紙三ヶ所にて漸く認め候……………三三五
- (百八十) いつも忘念の爲に敗戦となり……………三三五
- (百八十一) すくひ下さる辱さに報ひ奉らん爲に一生懸命に御仕へ申上るやう……………三三六
- (百八十二) 家庭佛教……………三三八
- (百八十三) 如來の愛我に在りて活けるなり……………三四〇
- (百八十四) 愛戀の情深く至誠の意堅からば聖靈交感などか疑はん……………三四三
- (百八十五) 光明の中に價値ある生活……………三四六
- (百八十六) 病軀をつかひ奉るを得し御蔭……………三四七
- (百八十七) 體は病るも心霊は安かれよ……………三四八
- (百八十八) 休む事無しにこの病人を使ひ下さることの辱さよ……………三四八
- (百八十九) 遠大なる望……………三四八
- (百九十) 一念佛にあれば一念の佛念々佛をやどせば念々の佛……………三五〇

- (百九十一) 四智圓明の月……………三五
- (百九十二) 怨執と云ふべき人に對しても少しも異なることなく……………三五
- (百九十三) 精神の共進……………三五
- (百九十四) 御なさけ……………三五
- (百九十五) 世尊に倣ひて……………三六
- (百九十六) 衆生心水澄みぬれば佛日のかげ宿る……………三五
- (百九十七) 親の心……………三五
- (百九十八) 妙用不測……………三五
- (百九十九) 靈 化……………三五
- (二 百) 光 陰……………三六
- (二百一) 咲かせずに捨て置くは惜しい花……………三六
- (二百二) 人生の行路……………三六

- (二百三) 暑さより精神が一層強からばあつさを生ずべきいはれなし……………三六一
- (二百四) 寒風身にしみるも御慈悲の懐はいつでも暖し……………三六一
- (二百五) 忙はしなき中に有り難さはすきまなく……………三六六
- (二百六) 奉 仕……………三六六
- (二百七) 大ミオヤの御保護……………三六九
- (二百八) 此世は大ミオヤの在す常樂世界に騰進すべき豫備科の學校  
の如きもの……………三七〇
- (二百九) 此大鐵關を開くの妙鍵は即ち十二光名……………三七二
- (二百十) 如來の光明には現在と未來との隔てなし……………三七五
- (二百十一) 拜 禮……………三七七
- (二百十二) 行は念佛の一行にあり解は十二の光明による……………三七八
- (二百十三) 千手觀音菩薩に倣うてはたらき……………三八一
- (二百十四) 光明主義の豫言者……………三八三



- (二百十五) 身の垢心の垢……………三九七
- (二百十六) 一蓮托生……………三九九
- (二百十七) 山水流音も七菩提分の音かときゝなす……………三九〇
- (二百十八) 眞實と方便……………三九二
- (二百十九) 佛陀伽耶鹿野寺拜禮弟子曠却以來の幸と存じ候……………三九六
- (二百二十) 今日も此仕事をば如來様より仰付けられたるものとおもひて……………三九七
- (二百二十一) 肉體の糧心靈の糧……………三九八
- (二百二十二) 螢ほどの光もなき身より日月にまさる光を放つ身となる……………三九六
- (二百二十三) ふつと心にかゝる雲いでぬるかと思ふと南無といふ聲の心の空には阿彌陀佛の皎月さやかなるおもひ……………四〇〇
- (二百二十四) 聖經和解……………四〇二
- (二百二十五) 行住坐臥心に忘れざる限り彌陀は面前……………四〇七
- (二百二十六) 今日のいのちは全く如來の賜なれば眞心に仕へ奉る……………四一〇

- (二百二十七) みこゝろに任せて……………四二
- (二百二十八) 念々不捨……………四二
- (二百二十九) みめぐみの中によろこばれん事を……………四二
- (二百三十) 心の垢も清らけく……………四三
- (二百三十一) 感謝の生活……………四四
- (二百三十二) たゞ念佛その外の事は一大事ではありません……………四四
- (二百三十三) 後昆の身に再現して世を救ふ……………四五
- (二百三十四) 念佛は情にありて理にあらず……………四七
- (二百三十五) 光明家庭……………四〇
- (二百三十六) 念々彌陀の恩寵に育まれ聲々如來の盤養を被る……………四三
- (二百三十七) 彌陀には現世未來の局限あるなし……………四三
- (二百三十八) 宗祖御傳は皮相、眞髓は二祖によるべし……………四四

(二百三十九)	心にかゝる浮雲もまた月をかざりの因縁ともなる……………	四三七
(二百四十)	心靈全生命か生れ出し其兆候として見佛す……………	四三九
(二百四十一)	光明を獲得せずば人生の恨事……………	四三三
(二百四十二)	相好を見るは人によりては難し光明に接觸するは易し……………	四三五
(二百四十三)	大宇宙の直説法を聞け……………	四三七
(二百四十四)	見不見に局はず如來と共に在るの信念こそ第一義……………	四三八
(二百四十五)	此身今生に度せずんは何れの生を期してか出離の縁あらん……………	四四三
(二百四十六)	發し難き道心……………	四四四
(二百四十七)	御名を呼び上る毎に答へ給ふ……………	四四五
(二百四十八)	唯懺悔如來の大慈悲を仰ぐのみ……………	四四八
(二百四十九)	辨榮病めども彌陀の光明全く時代を救ふ……………	四五〇
(二百五十)	光……………	四五二



## 辨榮聖者畧傳

編者謹誌

大ミオヤの無盡の大慈に催ほされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に想見して憧憬の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。東京に遊學して卍山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康

上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家あばらやに夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁わらを積んで蒲團ちやうぜんとなし、超然ゆうぜんとして勇猛ゆうまうに稱名しょうみょうし給ふ。建立こんりゆう寄附も一人一厘の結縁けちえんとして遠近あんきやを行脚ちよも中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨きしゃを積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進かんじんを始め給ふ。途を踏むに蟻ありは勿論若草までも懇ねんろに之を避け、大康上人の訃音ふいんに接しては即座に追恩別行に入つて不臥ふが念佛一百日に及び給ふ。更に一切經讀了。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊だいしょうしやくそんの御蹟みあとを巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪あみだきやうずえを施し給ふこと廿五萬餘部、普あまねく米粒名號みりやくごうを施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふこと實に無數、難化なんげの有縁うえん一人の爲にも數年方便ほうべんして猶措なほかず、寺の禮遇れいぐうを辭り態々わざわざ下男室に夜を明して勸化かんげの縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如來の大慈だいひを喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中ぼうちゆうに僅わずかの閑を得ては如來の尊像そんざう教化の御文に筆を

運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科學に至るまで孜々として研め給ひ、又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光萬民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ。超えて大正九年吹雪に更くる北越

の夜寒身に沁む勸化かんげの旅に老いの御聲に盡きぬ如來の御慈悲を傳へて最後の三昧會さいえを木枯悲しき柏崎かしわざきに導かれ給ひし十二月四日遷化せんげし給ふ。

仰ぎおもんみ惟ただれば内證ないじやう甚はなはだ深く外用げゆう亦廣大に、全分度生ぜんぶんどじやうの無我むがの力が無作むさの精進しやうじんに顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映ましまに在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信ぜざらむ。



御慈悲便不許複製價貳圓半  
大正十五年十月廿五日印刷  
大正十五年十月三十日發行  
編輯兼發行人東京市小石川  
區水道端二の四四田中木又  
印刷人印刷所東京市小石川  
區若荷谷町九八小林七太郎  
發行所東京市小石川區水道端  
二ノ四四ミヤヤのひかり社

仏陀禪那弁榮聖者御著

『お慈悲のたより』上巻

平成二年七月四日復刊

編者 田中木又

辨榮聖者御入滅七十周年記念出版

発行者 光明会本部

発行所 光明会本部

〒659

兵庫県芦屋市六麓荘町二〇一二〇  
電話 〇七七―二二―四九〇一番  
振替 神戸 二―六四番

印刷所 東進印刷工業株式会社